

津阪東陽『杜律詳解』 訳注稿 (三)

二宮俊博

本稿には、津阪東陽『杜律詳解』巻上の「臘日」詩から「曲江二首」其二までを収める。原文の「メ」は「シテ」に、「一」は「コト」に、「仄」は「トモ」にそれぞれ改めた。明らかに訓点が脱落していると思われる箇所には、これを補った。また詩句の左傍にとりどころ附されている和訓は、※をつけて改行して示した。書き下し文は、紙幅の都合で省略する。なお、詩題の上には便宜的に通し番号を施した。

* 本稿は、平成十四年度梶山女学園大学学園研究費(C)の研究報告の一部である。

- 007 臘日
- 008 奉和賈至舍人早朝大明宮
- 009 宣政殿退朝晚出左掖
- 010 紫宸殿退朝口号
- 011 題省中院壁
- 012 曲江二首 (其一)
- 013 曲江二首 (其二)

007 臘日

臘、歳終祭ノ名。古用「冬至、後第三戌之日」^(注1)。唐朝以「大寒後辰ノ日」^(注2)爲臘。漢舊儀^(注3)曰、臘ハ者報ス諸鬼神古聖賢有レ功ニ於民ニ者ニ也。肅宗、至德二載四月、公拜^(注4)左拾遺。此是冬之之作。拾遺ハ掌^(注5)供奉諷諫ヲ。當^(注6)本朝侍從ニ云。已下四首、所^(注7)以清華ナル也。

(注1) 『說文解字』四篇下に「臘、冬至の後三戌。臘は百神を祭る」と。

(注2) 『唐詩貫珠』巻五十一、冬至附臘日除夕に、この詩を載せ、「杜詩釈義に曰く、唐は大寒の後の辰の日を以て臘と為す」と。なお、『杜詩釈義』については、鄭慶篤他編『杜集書目提要』や周采泉『杜集書録』に著録しておらず、未詳。ちなみに、仇兆鰲の詳註(巻六)に引く明・趙大綱『杜詩測旨』にも、同様の指摘がある。

(注3) 後漢・衛宏の撰。『藝文類聚』巻五、歳時部下や『太平御覧』巻三十三、時序部に引く。なお、『漢旧儀』は、『唐詩貫珠』に挙げる。

(注4) 左拾遺は、門下省に属し、正員二名、従八品上。『大唐六典』巻八、門下省の条に「左補闕拾遺は、供奉諷諫、乗輿に扈從するを掌る」と云々と。杜甫が左拾遺の官を授けられた時期について、宇都宮遯庵の増広本に挙げる明・単復の年譜に至德二載(七五七)四月とし、おそらく東陽もこれに拠るが、五月のことである。『訳注稿』(一)、杜文貞公伝の(注23) 参照。

(注5) 清華は、清貴の官職にふさわしく、詩が上品で華やかなこと。

〔臘〕は、歳の終りに行う祭りの名。古代には冬至後三回目の戌の日

に行なわれた。唐朝では、大寒後の辰の日を臘とした。『漢旧儀』に云う、「臘は、もろもろの鬼神や古の聖賢、民に功労のあった者に報いるものである」と。肅宗の至徳二載四月、公は左拾遺に拜せられた。これは、その冬の作。拾遺は、天子の供奉諷諫を掌る。わが国の侍従に相当するという。以下の四首が清華なるゆえんである。

臘日常年暖尚遙^(注6) 今年臘日凍全消^(注7)

※凍：イテ

常年得^(注8)暖^(注9)、自臘後數十日、今年ハ凍已ニ全融シ、日氣暖然トシテ如春^(注10)也。

(注6) 〈常年〉、朱鶴齡の輯註(卷四)は〈長年〉に作り、「一に年年に作る」と注する。宇都宮遯庵の増広本にも輯註を挙げる。

〈常年〉だと暖かくなるのは、〈臘〉から数十日たった頃なのだが、〈今年〉は〈凍〉がもうすっかりとけ、陽氣がぼかぼかとして春のようである。

侵陵ニ雪色^(注11)還^(注12)萱草^(注13) 漏^(注14)洩^(注15)春光^(注16)有^(注17)柳條^(注18)

※還：ヨミガヘル

還猶^(注19)蘓^(注20)也。言^(注21)秋來所失^(注22)再^(注23)復^(注24)舊色^(注25)也。萱^(注26)於^(注27)諸草^(注28)最早^(注29)枯^(注30)、而春氣纔^(注31)動^(注32)、便^(注33)一番^(注34)茁^(注35)土^(注36)。今年陽和早^(注37)催^(注38)、雖^(注39)殘雪猶埋^(注40)、然^(注41)能侵^(注42)陵^(注43)之^(注44)、先^(注45)已^(注46)發生^(注47)スル也。洩^(注48)音^(注49)薛^(注50)、亦漏也。有^(注51)者、他日所^(注52)無^(注53)、今見^(注54)有^(注55)之也。先^(注56)時^(注57)漏^(注58)洩^(注59)春^(注60)含^(注61)芽^(注62)、亦已^(注63)見^(注64)有^(注65)柳條之動^(注66)也。蓋^(注67)天地氣^(注68)萬物含^(注69)春^(注70)、就^(注71)中^(注72)二物^(注73)尤得^(注74)氣^(注75)之先^(注76)、故^(注77)只^(注78)舉^(注79)二物^(注80)、而一切景象在^(注81)其中^(注82)矣。

(注7) 〈陵〉字、輯註は〈凌〉に作る。東陽が底本とした邵傳『集解』も同じ。

(注8) 基づくところがあるのか、不明。なお、還字について、鈴木虎雄『杜甫詩集』第一卷(『統国訳漢文大成』所収)は、マタと訓じ、吉川幸次郎『杜甫詩注』第五冊(筑摩書房、一九八三年)には「還萱草」の「還」は、ほれ、あの、やはり、例の、という程の軽い助字。旧來の和訓、マタあるいはナオ」と指摘。

(注9) 一番の語、唐代から見える口語で、ひとたび、一回の意だが、ここでは

「最初に」の意に用いるか。輯註に「侵凌雪色は、萱草初めて土を茁^(をひいづ)る時を言ふ」とある。宇都宮遯庵の増広本にも、これを引く。なお、〈萱草〉は、『詩経』衛風・伯兮に見える「諫草」のことで、和名はワスレグサ、カンゾウ。東陽が何に基づいているのか不明だが、その説く内容は、萱草よりも、款冬花(フキノトウ)に該当するように思われる。例えば、明・李時珍の『本草綱目』卷十六、款冬花の条に「宗奭曰く、百草中、惟だ此れ氷雪を顧みず、最も春に先んずるなり。故に世之を鑽凍と謂ふ」とある。

(注10) 例えば、明・梅膺祚『字彙』には「先結の切、音屑。漏洩なり」と。

(注11) ちなみに、後世「漏春和尚」と言えば、柳の別称。

(注12) 氣は、氣の盛んなるさま。『易』繫辭下伝に「天地絪縕、萬物化醇」と。絪縕は氣と氣と同じ。なお、022「至日興を遺る。北省の旧閣老・兩院の故人に奉寄す」詩二首其一に、氣の語が見え、東陽は「ハルメキタル」と左訓を施す。

〈還〉は、蘇とほぼ同じ。秋以来失われていたのが再びもとの色に戻ることを言うのである。〈萱〉は、草のなかでは最も早くに枯れ、春になるといちばん先に土の中から出て来る。〈今年〉はうららかな陽和の氣が早くも兆し、残雪がまだ積もっているとはいえず、それを押し退けて、もう生えて来ているのである。〈洩〉、字音は薛、やはり漏の意。〈有〉とは、昨日までなかったのが今日有るのを見ることである。季節に先んじて春氣を漏らし芽吹くのは、これもやはりすでに〈柳条〉の動くことに表われている。けだし天地氣の氣に包まれ、万物が春を含み、なかでもこの二つの物が春の氣配をまっさきに感じることができる。それゆえ、ただ二つの物を挙げているのだが、すべての景象は、そのなかに存在しているのだ。

縦^(注13)酒欲^(注14)謀^(注15)良夜^(注16)醉^(注17) 還^(注18)家^(注19)初^(注20)散^(注21)紫宸^(注22)朝^(注23)

※縦酒：オホノミ 謀：クメンスル

縦酒ハ謂^(注24)劇飲^(注25)。蔡邕獨斷^(注26)臘日ハ縦^(注27)吏民ニ宴飲^(注28)セシム。蓋^(注29)因^(注30)祭^(注31)夜宴^(注32)、故^(注33)曰^(注34)良夜^(注35)醉^(注36)。紫宸ハ本謂^(注37)天帝之居^(注38)。唐比^(注39)以^(注40)爲^(注41)殿^(注42)名^(注43)ト。日^(注44)視^(注45)朝^(注46)之所^(注47)。散^(注48)ハ朝^(注49)臘日ノ朝賀禮畢^(注50)退散^(注51)スル也。此聯錯綜

成^{シテ}句^ヲ、且欲^ス謀^ニ夜飲^ヲ、正^ニ在^ニ散朝^ヲ之後^ニ、是倒句^ノ法^也。^(注15)
 言始^ニ散^ニ紫宸之朝^ヲ而還^ニ家^ニ、欲^ニ謀^ニ良夜之宴^ヲ而縱飲^セ也。

(注13) 『唐詩實珠』に挙げる。蔡邕は後漢の学者(一三三〜一九二)。秦漢の文物制度などを記した『独断』は上下二巻。その巻下に見える。なお、『独断』には寛文九年(一六六九)刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集第十集』に影印を収む。また訳注に福井重雅編『訳注西京雜記』(東方書店、二〇〇〇年)がある。

(注14) 紫は、天帝の居とされた紫微星をいう。宸は、帝居の意。紫宸殿については、次の008「賈至舍人早に大明宮に朝するを奉和す」詩の詳解に見える。^(注15) 訳注稿(二)、001「張氏の隠居に題す」詩の(注12参照。ちなみに、宇都宮遯庵の詳説に「此一聯六句ヨリ五句ヘツツケテ、其義ヲ可レ取。此レ倒句ノ法ナリ」と。

〈縦酒〉は、劇飲のこと。蔡邕の『独断』に「臘日には、官吏と民衆とに好き放題、宴飲するのを許した」と。けだし祭にちなんで夜宴するので、〈良夜の酔〉という。〈紫宸〉は、もともと天帝の住居のこと。唐では擬えて宮殿の名とした。日々政務を執るところである。〈朝を散ず〉は、〈臘日〉の朝賀の儀式が終わって退散することである。この一聯は、錯綜して句を成している。それに夜飲もうと思うのは、ちょうど朝会がはててから後のことである。これは倒句の法だ。その意味は、やっと紫宸殿の朝会がはて、これから家に戻って、〈良夜〉の宴を〈謀〉つて存分に飲もうと思うというのである。

口脂面藥隨^ニ恩澤^ニ 翠管銀罌下^ニ九霄^ニ

※口脂……カンノベニ 面藥……トウヤク

唐ノ制、臘日宣^ニ賜^ス近臣^ニ口脂面藥^ヲ。口脂ハ、臙脂也。面藥ハ、蓋鉛粉ニ合^ニ香藥^ヲ者也。公爲^リ拾遺^一、得^レ預^ニ恩賜^ヲ。不^レシテ曰^ハ蒙^ニ而曰^ハ隨^ニ謙辭^也。翠管銀罌、所盛^ル之器也。管、筒也。西陽雜俎^(注17)に「臘日賜^ニ北門ノ學士^ニ口脂蠟脂^ヲ、盛^ル以^ニ碧縷ノ牙筩^ヲ。按^{スル}ニ劉禹錫有^ニ謝^ニ賜^ニ口脂面藥^ヲ表^ニ云、宣^ニ奉^ス聖旨^ヲ賜^ニ臣^ニ臘日ノ口脂面脂^ヲ紫雪紅雪^一。雕奩既^ニ開^ハ、珍藥斯^ニ見^ハル。膏凝^リ雪瑩^キ、合^レ液^ヲ騰^レ芳^ヲ。

又王建^(注20)宮詞「黃金合裏^ニ盛^ニ紅雪^ヲ、重結^ス香羅四出^ノ花、一一傍邊書^ニ勅^ノ字^ヲ、中使送與^ス大臣^ノ家。蓋^ニ口脂面藥^ヲ以^ニ禦^ニ寒凍^ヲ也。或曰、漢^(注21)惠帝時、黃門侍中、皆傳^ニ脂粉^ヲ。魏晉ノ習俗、尤多效^レ之。疑^{クハ}唐^(注22)朝亦復若^レ此。蓋潔^{シテ}身以^ニ進^ム、出^ニ於^ニ敬^ニ君^ヲ。故^ニ遂^ニ有^ニ是賜^一也。九霄^ハ九重^ノ之天。謂^ニ其深遠^一、比^ニ稱^ニ禁中^一。九^ハ爲^ニ陽數^一之極。算盤計^ニ物數^ヲ、亦究^ニ于^ニ九^一。至^ニレハ^ニ十二^一則爲^ニ一^一矣。故^ニ書傳^ニ凡^ニ言^ニ九^一者、皆指^ニ其極^ヲ爾。如^ニ九淵九垓之類^一、不^ニ必^ニシモ^一一^ニ數^一當^ニ。時^ニ公爲^ニ拾遺^一、眷遇^{セラル}、此日喜^レ逢^ニ臘祭^一、令^ニ節^一、天氣如^ニ春^一、草木發生^ス。欲^ニ置酒縱飲^一、盡^ニ良夜之歡^一。既^ニ退朝^一、還^ニ家^一、中使尋^ニ至^一、節物之賜、自^ニ天而下^一。翠管銀罌、恩榮輝光、是公一生得意^ノ時、不^レ可^ニ多得^一者也。^(注22)

(注16) 邵宝『集註』卷二十三、時序類に見える。薛益『分類』卷二、節序も同じ。いずれも、宇都宮遯庵の増広本に引く。『唐詩實珠』は「杜律虞註」を挙げる。

(注17) 晚唐・段成式(字は柯古、?〜八六三)の撰。ここに挙げる箇所は、その巻一、忠志に見える。なお、『西陽雜俎』には、元祿十年(一六九七)刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集第六集』に影印を収む。また平凡社東洋文庫に今村与志雄氏による訳注がある。ちなみに、北門の學士は高宗の時に置かれた。牙筩は象牙製の筒。なお、『西陽雜俎』は、輯註に引き、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。また『唐詩實珠』にも抄録して、これを引く。

(注18) 字は夢得(七七二〜八四二)。貞元十七年(八〇一)、淮南節度使の杜祐に代わって作った「曆日の面脂口脂を謝するの表」(『劉賓客文集』卷十二)に「臣某言す。中使霍子璣至り、聖旨を奉宣して臣及び將左・官吏・僧道・耆寿の百姓等を存問し、兼ねて臣に墨詔及び貞元十七年の新曆一軸、臘日の面脂・口脂・紅雪・紫雪並びに金花銀合二、含綾合二を賜ふ。(中略)雕奩既に開けば、珍藥斯に見はる。膏凝り雪瑩き、液を含み芳を騰ぐ」云々と。中使は宮中の使者。宦官が充てられる。紅雪、紫雪は薬の名。なお、宇都宮遯庵の詳説には、明・楊慎『丹鉛總錄』卷二十一、詩話類、口脂の条に、李嶠(六七五〜七四四)の「口脂を賜る表」、令狐楚(七

六六（八三七）の表それに劉禹錫の表を挙げて「杜詩註の遺を補ふ可し」というのを引く。『升庵全集』巻六十、口脂面葉の条もこれと同じ。また同集巻五十八、紅雪紫雪の条には、劉禹錫の表と王建の宮詞の例を挙げ

(注19) 原文には謝字の下に「レ」点を缺く。今、これを補う。

(注20) 王建（七七〇―八二九）の「宮詞」百首其六十七（『全唐詩』卷三〇二）。

なお、尾張の恩田仲壬（号は蕙楼。一七四三―一八一三）訓点による文化七年（一八一〇）刊の『唐王建詩集』がある（汲古書院、『和刻本漢詩集成唐詩第八輯』に影印を収む）。また伊勢の東斐（号は夢亭。一七九六―一八四九）に『王建宮詞百首箋注』があるが、未見。

(注21) 『史記』卷二五、佞幸列伝に「孝惠の時、郎・侍中、皆鵷鵠を冠し、貝帶し、脂粉を傅す」と。傳は附の意。『漢書』卷九十三、佞幸伝にも同様の記事。

(注22) 『唐詩實珠』に「此れ是れ公拾遺^たなりし時、臘日の令節に逢ふを喜ぶの作。通篇天氣和暖、草木生発し、良夜酒を飲み、朝參早に帰り、更に恩賜を受く。此れ公が一生得意の時、多く見る可からざる者なり」と指摘する。

唐代の制度では、臘日、近臣に〈口脂〉や〈面葉〉を下賜された。

〈口脂〉は、臙脂である。〈面葉〉は、けだし鉛粉に香葉を混ぜ合わせたものであろう。公は拾遺となつて恩賜に与かることができた。蒙ると言わず、〈随ふ〉と言ふのは謙遜の辞である。〈翠管〉（銀簪）は、それを盛る器。〈管〉は、筒である。『酉陽雜俎』に「臘日、北門の学士に、口脂・蠟脂を碧縷の牙筩に盛つて下賜された」とある。按ずるに劉禹錫に「口脂面葉を賜ふを謝する表」があり、「聖旨を承り、臘日に口脂・面脂・紅雪・紫雪を賜りました。浮かし彫りが施された盒の蓋を開けると、膏がねつとりと雪のように輝き、どろんとした液からとてもよい香が立ち上つて来ました」といい、さらに王建の「宮詞」に「黄金合裏紅雪を盛る、重ねて結ぶ香羅四出の花。一傍辺に勅の字を書し、中使送与す大臣の家」という。けだし〈口脂〉や〈面葉〉は、それで寒さや凍てを禦ぐのであろう。或いはいう、漢の恵帝の時、黃門や侍中はみな脂粉をつけ、魏晉の習俗もほ

とんどそれに倣つた。唐朝でもやはりこのようであつたのだろう。けだし身を清潔にして進見するのは、君を敬する気持ちから出ることであつて、さればかくてこのように下賜されるようになったのである。〈九霄〉は、九重の天。深遠の意で、比して禁中を称す。〈九〉は陽数の極で、算盤で計算する時も九できわまり、十に至ると一になる。されば、古典にすべて〈九〉という場合は、いづれもその極数を指しているだけのことだ。九淵・九垓といった類で、いちいち数えるまでもない。時に公は拾遺となつて眷遇を受けており、この日、臘祭の節日にゆきあつたのを喜んだ。天氣は春のようで草木は芽生え、酒を用意して存分に飲み、〈良夜〉の歡を尽くしたいと思つてた。朝廷を退き家に戻つて来ると、まもなく中使がやつて来て、季節の品をかしこきあたりより賜つた。〈翠管〉や〈銀簪〉は、恩榮に輝いている。これは公が一生のうち得意の時で、多くは得られなかつたものなのである。

008 奉^レ三和^ス賈^至舍人^早大明宮^ニ

奉猶恭^レ也。和^ハ者同賦^ニ其事^ヲ、以答^ニ來意^ニ。猶有^ニ首唱^{スル}歌^ヲ者^上隨而和^{スル}之^ヲ也。中書省^ノ起居舍人^見于前^ニ。此蓋朝^ニ大明宮^之宣政殿^也。唐^ノ禁城大内^ヲ爲^ニ太極宮[、]東内^ヲ爲^ニ大明宮[、]在^ニ龍首山^ノ上^ニ。此地^ハ本太極宮^ノ之後苑^ニシテ、在其東北^ニ。故^ニ謂^ニ之^ヲ東内[、]而謂^ニ大内^ヲ爲^ニ西内^{。高宗厭^ニ西内^ノ湫隘[、]修^ニ東内^ヲ移^ス仗^ヲ。自^レ是天子多在^ニ東内^ニ、制度尤爲^ニ華備^{。正南^ヲ爲^ニ丹鳳門^{。門内第一^ノ正殿^ヲ曰^ニ含元殿^{。謂^ニ之^ヲ大朝^{。在^ニ周^ノ爲^ニ外朝^{。元旦冬至^ノ大朝會^ハ御^ス之^ニ。其後^ヲ曰^ニ宣政殿^{。謂^ニ之^ヲ前殿^{。亦曰^ニ正衙^{。即周^ノ内朝^{。凡^ノ朔望^ノ起居及大册拜[、]對^ニ四夷^ノ君長^ノ御^ス之^ニ。又北^ニ而爲^ニ紫宸殿^{。乃^ニ内便殿[、]謂^ニ之^ヲ内衙^{。即周^ノ燕朝^{。亦謂^ニ之^ヲ閣^{。猶^ニ古^ノ之^ヲ言^カ寢^ト。隻日^ノ常朝^ハ御^ス之^ニ。雙日^ハ不^レ視朝^ヲ。宰相當^レ奏^{スル}事^ヲ、即時特^ニ御^ニ延英殿^ニ召對^也。此篇^ハ是^ニ三月^ノ詩、}}}}}}}}}}}}}}

則非^レ含元殿^ニ矣。衙^ハ朝見、其禮尊^シ。閣^ハ宴見、其事殺^{（注11）}。詩中所敘^{スル}尊嚴廣大、故^ニ知宣政之朝會^{ナルヲ}也。

（注1）賈至、字は幼機。洛陽の人（七一八〜七七二）。開元の末もしくは天宝の初めに明経科に及第し、校書郎・單父県尉などを経て、天宝末、起居舎人となる。安祿山の乱が起ると、玄宗に扈從して蜀に行き、中書舎人に遷り、至徳元載（七五六）八月、肅宗へ位を伝える冊文を撰して、これを奉じて靈武の肅宗のもとへと赴いた。乾元元年（七五八）、房琯の一派だとして汝州刺史に出され、さらに岳州司馬に貶謫されたこともあったが、次の代宗の時、中央に復帰し、中書舎人・尚書右丞・礼部侍郎・兵部侍郎・京兆尹・右散騎常侍などを歴任し、大暦七年（七七二）卒した。『旧唐書』卷一九〇、『新唐書』卷一九。『唐才子伝』卷三。独孤及「賈尚書を祭る文」（『毘陵集』卷二十、『全唐文』卷三九三）。その事跡については、傅璇琮「賈至考」（『唐代詩人叢考』所収、中華書局、一九八〇年）に詳しい。松浦友久編『統校注唐詩解題辭典（付）歷代詩』（大修館、二〇〇一年）詩人小伝、賈至の条（植木久行執筆）参照。

ちなみに、杜甫には「賈嚴二閣老に留別す」（詳註巻五）、「賈閣老の汝州に出さるを送る」（詳註巻六）、「岳州の賈司馬六丈、巴州の嚴八使君両閣老に寄す五十韻」（詳註巻八）、「唐十五誠に別る、因つて礼部の賈侍郎に寄す」（詳註巻十四）等の作がある。

（注2）訳注稿(二)、004「献納使起居田舎人澄に贈る」詩参照。

（注3）龍首については、後漢・班固「西都の賦」（『文選』巻一）に「澧瀟を挟み、龍首に抱る」、後漢・張衡「西京の賦」（同上巻二）に「龍首を疏して以て殿を抗げ、状巍然として以て爰樂たり」と見え、南宋・程大昌（一一二二〜一九五）の『雍録』巻一、龍首山龍首原の条に「高宗に至つて已に風痺に染まり、太極宮の下湿なるを惡み、遂に遷る。東北角龍首山上に抱つて別に大明一宮を爲る」という。高宗は、唐第三代の天子（李治、在位六四九〜六八三）。

（注4）『雍録』巻三、唐宮総説に「唐の都城、三大内有り。（中略）太極宮、西に在り、故に西内と名づく。大明宮、東に在り、故に東内と名づく。別に興慶宮なる者有り、（中略）南内と号す。此の三内嘗て更も迭ひに朝を受け、大明、朝を視ること最も数しばなり」と。

（注5）湫隘は、手狭な上に低湿地であること。『左伝』昭公三年に齊の景公が

晏子に「子の宅、市に近し。湫隘囂塵、以て居る可からず」といった言葉がみえ、杜預の注に「湫は下、隘は小」と。

（注6）移仗は、天子の出行をいう。ここは、居を移すこと。『雍録』巻三、唐東内大明宮の条に「龍朔二年（六六二）、高宗風痺に染まり、太極宮の卑下を惡み、故に就いて大明宮を修め、名を蓬萊宮と改む」と。

（注7）例えば、『宋史』巻二八四、宋庠伝に「唐に大内有り。又大明宮有り。宮は大内の東北に在り、高宗以後、天子多く在り。大明宮の正南門を丹鳳門と曰ふ。門内の第一殿を含元殿と曰ひ、大朝会のとき則ち之に御す。第二殿を宣政殿と曰ひ、之を正衙と謂ふ。朔望の大冊拜のとき則ち之に御す。第三殿を紫宸殿と曰ひ、之を上閣と謂ふ。亦た内衙と曰ふ。隻日の常朝のとき則ち之に御す」云々とある。

なお、伊藤東涯の『制度通』（寛政九年「一七九七」刊）巻二、内朝外朝並二朝会ノ事に、「漢ヨリ以来、大朝会ノ礼有り、又是ラ大享ト云ヒ、朝賀ト云、本朝ノ節会ノコトナリ」といい、また「唐ノ時、百官朝見ノ次第、三所アリ。正衙、便殿、含元殿ナリ。古ヘノ三朝ニナゾラフ。正衙トイフハ、宣政殿ノ事ニテ、古ヘノ治朝ナリ。便殿トイフハ、紫宸殿ノコトニテ、イニシヘノ燕朝ナリ。正衙コレヲ常参ト云、便殿コレヲ入閣ト云。コノ外ニ又含元殿アリ、下ニ詳ニス。衍義補^二云、唐以^テ宣政殿^ヲ為^ス前殿^ト、謂^フ之^ヲ正衙^ト、即古之治朝也。以^テ紫宸殿^ヲ為^ス便殿^ト、謂^フ之^ヲ入閣^ト、即古之燕朝也。而外別^ニ有^ニ含元殿^一。含元ハ非^レ正至大朝会^ニ不^レ御^ト、正衙ハ則日^ニ見^ル群臣^ヲ、百官皆在、謂^フ之^ヲ常参^ト、是ニテソノ大略シルベシ」という。ちなみに、『衍義補』は、明・丘濬（一四二一〜一四九五）『大学衍義補』のこと。その巻四十五、王朝之礼上に見える。

（注8）例えば、『歴代名臣奏議』巻九および『統資治通鑑』巻十六、宋・太宗淳化二年（九九一）の条、張洎の上疏に、「今の乾元殿は、即ち唐の含元殿なり。周に在つては外朝と為し、唐に在つては大朝と為す。冬至元旦、全仗を立て、万国を朝するは、此の殿に在るなり。今の文德殿は、即ち唐の宣政殿なり。周に在つては中朝と為し、漢に在つては前殿と為し、唐に在つては正衙と為す。凡そ朔望の起居及び妃后・皇子・王公・大臣を冊拜し、四夷の君長に対し、制策の挙を試みるは、此の殿に在るなり。今の崇徳殿は、即ち唐の紫宸殿なり。周に在つては内朝と為し、漢に在つては宣室と為し、唐に在つては上閣と為す。即ち隻日常朝の殿なり」とある。

(注9) もっとも、『雍録』巻四、延英殿の条には「高宗初め蓬萊宮を崩^{たふ}りしとき、諸門殿亭皆已に名を立つ。上元二年(七六一)に至って、延英殿御座に当たり玉芝(瑞草の名)生ず、則ち是れ初め大明有りしとき即ち延英殿有り。顧召して宰臣に対するは則ち代宗に始まるのみ。代宗、苗晋卿の年老い蹇甚だしきを以て閣に入りて趨せざるを聴^きし、為に延英に御す。此れ優礼なり」という。また、その場所については、『大唐六典』(巻七、工部尚書の条)に拠つて「宣政殿前の西、上閣門の西、即ち延英門為り。門の左、即ち延英殿」とする。

(注10) ちなみに、傅璇琮主編『唐代文学編年史』【中唐巻】では、乾元元年(七五八)二月に繫年する。

(注11) 『公羊伝』僖公二十二年、「辭繁にして殺せざる者は正なり」の条、何休の注に「殺は省なり」と。

〈奉〉は、恭とほぼ同義。〈和〉は、ともにその事を賦して、来意に答えること。ちようどはじめに歌う者がいて、それに続けて唱和するようなものである。中書省の起居舎人のことは、前に見える。ここでは、けだし〈大明宮〉の宣政殿に朝するのであろう。唐の禁城は、大内を太極宮とし、東内を大明宮として、龍首山の上にあった。この地は本来、太極宮の後苑であつて、その東北に位置していた。それで東内といい、大内を西内とした。高宗は西内が手狭で低湿地にあるのを厭い、東内を修築して移られた。それ以来、天子は多く東内におわしまし、設えや調度品はとりわけ豪華で完備しているとされていた。その真南が丹鳳門で、門内にある第一の正殿を含元殿といい、大朝のことである。周代では外朝にあたる。元旦や冬至の大朝会の時、天子がここにお出ましになる。そのうしろを宣政殿といい、前殿のことで、正衙ともいう。即ち周の内朝である。すべて月の朔(一日)および望(十五日)の起居や皇后や太子を冊立したり大臣を任命する大冊拜の時、さらに夷狄の君長に対面なされる場合には、ここにお出ましになる。それから北にゆく紫宸殿。これぞ内便殿で、内衙のこと。即ち周代の燕朝で、閣ともいう。ちよう

ど古代に寝といわれるものである。隻日(奇数日)の常朝(一般的政務)には、こちらにお出ましになる。双日(偶数日)には政務を執られない。宰相が至急奏上する必要がある場合には、ただちにわざわざ延英殿にお出ましになり、そこに召されて奉答する。この篇は三月の詩。だとすれば含元殿ではない。衙で行なわれるのは朝見で、その礼式は尊厳であるが、閣のは宴見で、その次第は略式である。この詩に述べられているのは尊厳廣大であり、されば宣政殿での朝会だと知られるのである。

五夜^(注12)漏聲催^(注13)曉箭^(注14) 九重^(注15)春色醉^(注16)仙桃^(注17)

※五夜漏声：アケナ、ツノトケイ 曉箭：ジコクノカズトリ 醉…ト

ロリ

五夜^(注12)ハ寅時也。漢魏以來、紀スルニ夜ヲ以レ五ヲ爲レ節ト、以ニ甲乙丙丁戊ヲ稱^(注13)之^(注14)。故ニ曰ニ五夜^(注15)ト。又謂^(注16)之^(注17)五更^(注18)。漏^(注19)貯^(注20)水^(注21)定^(注22)時刻^(注23)之^(注24)器^(注25)。以ニ銅^(注26)壺^(注27)受^(注28)水^(注29)刻^(注30)スレ節^(注31)。晝夜^(注32)共ニ百^(注33)節^(注34)謂^(注35)之^(注36)漏^(注37)刻^(注38)。古^(注39)無^(注40)自鳴^(注41)鐘^(注42)、故^(注43)ニ漏^(注44)下^(注45)量^(注46)時^(注47)。箭^(注48)更^(注49)籌^(注50)也。此^(注51)先^(注52)言^(注53)夜^(注54)嚮^(注55)晨^(注56)。凡^(注57)朔望^(注58)朝禮^(注59)、百官^(注60)侵^(注61)曉^(注62)詣^(注63)闕^(注64)待^(注65)漏^(注66)、五更^(注67)三點^(注68)候^(注69)青^(注70)鎖^(注71)開^(注72)隨^(注73)班^(注74)雁行^(注75)而^(注76)入^(注77)也。九重^(注78)ハ稱^(注79)禁^(注80)中^(注81)穆^(注82)穆^(注83)。楚^(注84)詞^(注85)ニ君^(注86)之^(注87)門^(注88)以^(注89)九重^(注90)。九義^(注91)見^(注92)于^(注93)前^(注94)。醉^(注95)ハ謂^(注96)春色^(注97)氣^(注98)風^(注99)。唐^(注100)殿^(注101)庭^(注102)閒^(注103)、多^(注104)植^(注105)花^(注106)柳^(注107)。爲^(注108)三朝^(注109)會^(注110)之時^(注111)百官^(注112)依^(注113)其^(注114)陰^(注115)也。禁^(注116)内^(注117)名^(注118)花^(注119)、非^(注120)二入^(注121)閒^(注122)之^(注123)種^(注124)、故^(注125)ニ稱^(注126)爲^(注127)仙桃^(注128)。非^(注129)必^(注130)用^(注131)西^(注132)王^(注133)母^(注134)事^(注135)。蓋^(注136)曉^(注137)景^(注138)漸^(注139)分^(注140)、桃^(注141)花^(注142)紅^(注143)艷^(注144)映^(注145)天^(注146)、殿^(注147)庭^(注148)氣^(注149)色^(注150)爛^(注151)漫^(注152)如^(注153)醉^(注154)也。或^(注155)以^(注156)爲^(注157)二桃^(注158)花^(注159)若^(注160)含^(注161)醉^(注162)淺^(注163)矣。按^(注164)スルニ禮^(注165)ノ玉^(注166)藻^(注167)朝^(注168)辨^(注169)色^(注170)始^(注171)入^(注172)、君^(注173)ハ日出^(注174)而^(注175)視^(注176)之^(注177)。此^(注178)言^(注179)二辨^(注180)色^(注181)始^(注182)入^(注183)之^(注184)景^(注185)也。

(注12) 輯註(巻四)に錢注(巻十)に拠つて衛宏『漢書儀』の「五夜は、甲夜乙夜丙夜丁夜戊夜」というのを引く。また『顔氏家訓』巻六、書證第十七に「漢魏以來、謂ひて甲夜・乙夜・丙夜・丁夜・戊夜と爲す。又た一鼓・二鼓・三鼓・四鼓・五鼓と云ひ、亦た一更・二更・三更・四更・五更と云ふ。皆五を以て節と爲す」と。いずれも宇都宮遷庵の増広本にこれを挙げ

る。なお、『顔氏家訓』には、寛文二年（一六六二）刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集第十集』に影印を収む。また平凡社東洋文庫に宇都宮清吉氏による訳注がある。

(注13) 『大唐六典』卷十、秘書省太史局、挈壺生の条に「冬は夜漏六十刻、昼漏四十刻、春分秋分は夜漏五十刻、昼漏五十刻、夏至は夜漏四十刻、昼漏六十刻」とある。

(注14) 明・謝肇淛『五雜俎』卷二、天部二に「西僧琺瑯寶、自鳴鐘有り。中に機關を設く。一時に遇ふ毎に輒ち鳴る。是の如くにして歳を経て頃刻の差訛無きや、亦た神なり」と見える。琺瑯寶は、イタリアの宣教師マテオ・リッチのこと。

(注15) 022 「至日興を遣る。北省の旧閣老・兩院の故人に奉寄す」詩二首其一首聯に「去年茲の辰御牀を捧ぐ、五更三点鷓鴣行に入る」とあり、詳解に更は、歴なり、経なり。故に夜時を五分して之を更と謂ふ。漏刻、更毎に五点を分つ。点は漏を下る滴水を以て名と為す。五更三点は、寅の刻の六分なり」と。

(注16) 青瑣と同じ。宮門をいう。ちなみに、青瑣については、訳注稿(一)、004「献納使起居田舎人澄に贈る」詩参照。

(注17) 例えば『礼記』曲礼上に「天子穆穆」とあり、唐・賈公彦の疏に「穆穆は、威儀多き貌」と。

(注18) 『楚辞』九辨。『文選』卷三十三にも収む。

(注19) 007「臘日」詩。

(注20) 邵傳『集解』に「唐の殿中、花柳を種」、『唐詩貫珠』卷二、帝京二に、賈至の「早に大明宮に朝し兩省の僚友に呈す」詩を載せ、「唐時殿庭、皆花柳を植ゑ、遂に風雅の助と為す」と。唐の宮廷に花柳が植えられていたこと、南宋・朱熹（一一三〇—一一〇〇）にも指摘がある（『朱子語類』

卷二八、本朝二、法制）。

(注21) 輯註に「仙桃酔ふは、春色の穠、桃花酔ふが如きを言ふ。禁内に在るを以ての故に仙桃と曰ふ。王母の事を用ふるに非ず」と。また顧宸『辟疆園杜律註解』七言律詩卷一に「諸註皆仙桃を以て西王母が漢の武帝に五桃を与ふる故事と為し、謂へらく天子九重の上に御し、其の容顔春色の桃に酔へるが如しと。此れ陋説なり」と指摘する。宇都宮遯庵の増広本に輯註および顧註を引き、詳説には顧註を挙げる。なお、西王母の故事は『漢武故

事』に見える。

(注22) 顧宸『註解』に「禁内の春色爛漫として其の桃盛んに開くこと酔ひを含むが若きなり」と。宇都宮遯庵の両著に引く。

(注23) 『礼記』玉藻篇。

〈五夜〉は、寅の刻である。漢魏以来、夜を記するのに五つに分けて甲乙丙丁戊でこれを称した。それで〈五夜〉といい、また五更という。〈漏〉は、水を貯めて時刻を定める器械。銅壺で水を受け節を刻んだ。昼夜で百節があり、これを漏刻といった。古代には自鳴鐘がなかったため、〈漏〉が下がることで時間を計った。〈箭〉は、更籌（時刻の数とり）である。ここではまず夜から明け方になろうとするのを言う。すべて月の朔及び望の朝礼では、百官は暁について宮闕に至り、〈漏〉が五更三点を示し、宮門が開くのを待つて班列に随い、雁行して入るのである。〈九重〉は、禁裏のうるわしくりっぱなことを称する。『楚辞』に「君の門以て九重」と。〈九〉の意味は前に見える。〈酔〉は、春色の立ちこめていること。唐では殿庭の間に多く花樹や柳を植えた。朝会の時、百官がその蔭に依るためである。禁裏の名花は、この世のものではなく、されば〈仙桃〉と称するのである。必ずしも西王母の故事を用いたものではない。ただし、しだいにあやめを分かつようになると、桃の紅く艶やかな花が天に映え、殿庭の景色は爛漫と酔うがごとくである。桃花が酔いを含んでいるのだとみなす説もあるが、理解が浅い。按ずるに『礼記』玉藻に「朝するは色を辨じて始めて入り、君は日出でて之を視る」とあるが、これはあやめを分かつようになってから、ようやく入朝する情景を言うのである。

旌旗日暖ニシテ龍蛇動キ 宮殿風微ニシテ燕雀高シ

※暖…ホツコリ 動…ユラメク 微…ソヨ／＼

獨舉旌旗ヲ、諸儀仗在ニ其中ニ矣。讀者須ニ想像シテ而得ニ也。日暖ハ言旭日始升曉寒全融也。龍蛇畫ニ於旌旗ニ者、動ハ言映

レシテ日ニ活動スル也。此即君出テ而臨朝ニ之時也。風微ハ朝氣太静ニシテ細風徐ニ來也。燕雀ハ即殿廡ノ所ノ棲者。高ハ言「颺」風ニ高ク翔一也。

一聯極ニ寫ニ春朝和暄ノ光景一。見ニ時和ノ物育ニ泰平氣象一。龍蛇燕雀ハ真假取レ對テ、謂ニ之ヲ借對ト。宮殿燕雀ハ暗ニ用ニ大廈成ニ而燕雀賀スル之意。時祿山ノ亂後、殿閣新ニ修スル也。不レハ然ラ和スル人ニ用ニ燕雀

マ、不レ免ニ唐突一矣。風微ノ二字、言ニ朝景之靜ニナルヲ、而形ニ容ニ燕雀ノ輕態一。宛然トシテ如レ見ルカ。劉須溪云、壯麗自是、若シ非ニ微ノ字ノ清酒ニ、不レ免ニ癡肥ヲ矣。

(注24) 〈旗〉字、輯註には〈旂〉に作り、「俗に旗に作るは非」と注する。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注25) 原文は、見字の下の「二」点を「一」点に誤まる。

(注26) 後漢・張衡「埽田の賦」(『文選』卷十五)に「仲春の令月、時和し氣清む」、同じく「東京の賦」(同上卷三)に「陰陽交和し、庶物時に育す」と。

(注27) 『夜航詩話』卷四に「真仮対を取る、之を借対と曰ふ。亦た活対と曰ふ」といふ、唐詩のみならず宋元詩からも多くの例を挙げてゐる。

(注28) 『淮南子』説林訓に「湯沐具はりて蟻蝨相相し、大廈成りて燕雀相賀す。憂樂別るればなり」と。このこと、顧宸「註解」に既に指摘する。

(注29) 劉須溪は、宋末元初の文人名は辰翁、字は会孟。一二三二(一二二九七)。東陽が引く箇所は、劉辰翁批点・高楚芳編『集千家註批点杜工部集』(巻四)に見える。ちなみに、この書はわが国でも室町以降流布した。『天理図書館善本叢書』(八木書店、一九八七年)に影印本が収められている。黒川洋一氏の解題参照。

ただ〈旂旗〉を挙げてゐるだけだが、各種儀仗の類はそのなかに含まれている。読者は想像して分からねばならぬ。〈日暖〉は、旭日がようやく昇って、明け方の寒さがすっかり消えたのを言うのである。〈龍蛇〉は、〈旂旗〉に描かれたもの。〈動〉は、日光にきらめいて動く様子。これは君がお出ましになり、朝廷に臨御される時の様子にほかならない。〈風微〉は、朝廷のしんと静まりかえった気配のなか微風がおもむろに吹いて来ることである。〈燕雀〉は、宮殿の軒

端に棲んでいるもの。〈高〉は、風に乗って高く翔ぶことを言う。この一聯は、春の朝廷のおだやかな情景を描写している。時は和やかで万物がすくすくと育つ太平の氣象をあらわしている。〈龍蛇〉〈燕雀〉は、本物(真)と偽物(仮)とが対偶になっている。これを借対という。〈宮殿〉〈燕雀〉は、暗に「大廈成りて燕雀相賀す」の意を用いている。当時、安祿山の乱が終熄した後で、殿閣が新たに修築されたばかりなのである。そうでなければ、人に和するのに〈燕雀〉の語を用いるのは、唐突の感を免れない。〈風微〉の二字は、朝廷の景色の静寂なるを言い、〈燕雀〉の軽やかな様子を形容している。

ありありとまるで目に浮かぶようだ。劉須溪が云う、「壯麗なのはそれでけっこうだが、もし〈微〉字のさっぱりとした感じがなければ、ごてごてとした缺点を免れぬ」。

朝罷・香煙攏・滿袖ニ 詩成テ珠玉在ニ揮毫ニ

※滿袖：タモトニアマル
香煙ハ御鑪ノ香氣。攏ニ滿袖ニ言下以ニ近臣ヲ密ニ御前ニ。唐書儀衛志、朝日宰相兩省ノ官ハ對班ス於香案前ニ。百官班ニ於殿廷ニ。是中書舍人ハ班近ニ香案ニ。即其詩ニ所云衣冠ノ身ハ惹ニ御鑪ノ香一也。詩ハ指ニ賈ノ所作。珠玉ハ比ニ詞藻之美。在者言下珠玉自ニ毫端ニ湧出スル也。

(注30) 『新唐書』卷二十三上、儀衛志上に「朝の日、殿上に黼黻・熏爐・香案を設く。御史大夫、属官を領して殿の西廡に至り、從官朱衣伝呼し、百官を促して班に就かしむ。文武、兩觀に列す。監察御史二人、東西朝堂の輶道に立ちて以て之に泄む。平明、伝呼畢はり、内門開く。監察御史、百官を領して入る。階を夾み、監門校尉二人、門籍を執りて曰く、籍を唱せよと。既に籍を視れば曰く、在りと。入り畢はりて止む。次の門も亦た之の如し。班を通乾・觀象門の南に序し、武班は文班の次に居る。宣政門に入るに、文班は東門自りして入り、武班は西門自りして入り、閣門に至るも亦た之の如し。夾階校尉十人同唱し、入り畢はりて止む。宰相兩省の官は香案の前に対班し、百官は殿庭の左右に班す」云々と。

(注31) 賈至の「早に大明宮に朝し兩省の僚友に呈す」詩のこと。この詩は、

(注39) (注40) にそれぞれ挙げる王維や岑参の詩とともに『唐詩選』巻五にも収められている。賈至の原作は次のとおり。

銀燭朝天紫陌長
禁城春色曉蒼蒼
千條弱柳垂青瑣
百轉流鶯繞建章
劍佩聲隨玉墀步
衣冠身惹御爐香
共沐恩波鳳池上
朝朝染翰侍君王

銀燭 天に朝して 紫陌長し
禁城の春色 曉蒼蒼
千条の弱柳 青瑣に垂れ
百轉の流鶯 建章を繞る
劍佩 声は玉墀の歩みに随ひ
衣冠 身は御爐の香を惹く
共に恩波に沐す 鳳池の上
朝朝 翰を染めて君王に侍す

〈香煙〉は、御爐の香氣。〈滿袖に携ふ〉は、近従の臣であるので御前近くに侍っていることを言う。『新唐書』儀衛志に「朝見の日、宰相および中書門下兩省の官僚は、香炉の置かれた案几の前に左右に整列し、百官は殿廷に整列する」とある。中書舍人は、その位置が香炉のある案几に近い。賈至の詩に云う「衣冠の身は御爐の香を惹く」にほかならない。〈詩〉は、賈至の作を指す。〈珠玉〉は、詞藻の美に喩える。〈在〉とは、〈珠玉〉が筆端より湧き出るのを言うのである。

欲^{セハ}知^下世^ル掌^ニ絲綸^美 池上^于今有^ニ鳳毛^一

※世：ダイ／＼ 糸綸：ミコトノリ 池上：ヤゴトナキ 鳳毛：チ、ニオトラヌ

絲綸ハ謂^ハ制誥^ヲ。禮記^ニ王言如絲^ノ、其出^{コト}如綸^ノ。美ハ謂^ニ父子繼^ニ書省^一。晉書^ニ荀勗自^ニ中書監^一爲^ニ尚書令^一。人賀^ス之^ヲ。勗曰^ク、奪^{ハレ}我鳳皇池^ヲ、何賀^ス也。蓋中書^ニ凝邃^一、故^ニ以^ニ比^ニ天上^ノ鳳皇池^一也。南史^ニ宋^ノ謝鳳子超宗有^ニ文辭^一。孝武見^ニ其文^一、嗟賞^シ曰^ク、超宗殊^ニ有^ニ鳳毛^一。謂^ニ其得^ニ父之文采^一、因^ニ父^ノ名^一以^ニ比^ニ鳳之羽毛^一也。公自註^ニ舍人先世嘗^ニ掌^ニ絲綸^一。按^ニ唐書^一、賈曾景雲中擢^ニ中書

舍人^一。子至天寶^ノ末又拜^ニ中書舍人^一。父子繼^ニ美^一、明皇嘗^テ稱^ス之^ヲ。此更^ニ推開^ニ泛向^ニ世人^一稱^ス之^ヲ。欲^{セハ}知^下賈氏掌^ニ詔誥^一、世^ノ濟^ニ其美^一之盛^{ナル}、須^レ見^ニ鳳皇池上^一、貴要之地、于^テ今^ニ有^ニ鳳毛之相繼^一、不^中唯其父而已^上也。此篇前四句早^ニ朝^ニ大明宮^一、後四句美^ニ賈舍人^一也。第五句言^ニ退朝之事^一、結^テ上生^ス下^ヲ。第六句言^ニ舍人有^ニ詩^一、就^ニ讀^ニ美^一之^ヲ。結更^ニ推本^ニ贊^ニ父子繼^ニ美^一之盛^一。施及^ニ先世^一、厚^キ之至也。顧修遠註^ニ云^一、因^ニ賈原唱^ニ有^ニ鳳池二字^一、公遂^ニ折用^ニ之^一、以^ニ贊^ニ父子繼^ニ美^一。蓋世^ノ掌^ニ絲綸^一、惟賈氏^ノ爲^ニ然^一。王維岑参之和亦皆用^ニ鳳池^一。俱不^レ過^ニ泛言^一、中書^ヲ未^レ免^ニ雷同^一、而公則用^ニ以^ニ稱^ニ父子^一。不可^ニ移易^一以^ニ和^ニ他人^一。是公詩所^ニ以^ニ獨步^一也。

(注32) 『礼記』緇衣篇。天子の言葉は絹糸のように細くとも、臣下はそれを綸(官印を身に結ぶ組紐)のように心得るという意。

(注33) 『左伝』文公十八年に「世よ其の美を濟し、其の名を限さず」。

(注34) 『晋書』卷三十九、荀勗伝に「荀勗久しく中書に在り、機事を専管す。之を失ふに及び、甚だ罔罔恨す。或いは之を賀する者有り。勗曰く、我が鳳皇池を奪ふに、諸君我を賀するや」とある。

(注35) 『南史』卷十九、謝靈運伝に附された謝超宗の伝に「(謝)鳳の子超宗、(中略)好字にして文辭有り。盛んに名譽を得。新安王(劉)子鸞の国常侍に選補せらる。王の母、殷淑儀卒す。超宗、誄を作り之を奏す。帝大いに嗟賞し、謝荘に謂ひて曰く、超宗殊に鳳毛有り、靈運復た出づ」と見える。ちなみに、超宗は、劉宋・謝靈運(三八五—四三三)の孫にあたる。

(注36) 原文には有字の下に「二」点を缺く。今、これを補う。

(注37) 『新唐書』卷一九、賈曾伝に「賈曾、河南洛陽の人。(中略)曾少くして名有り、景雲中、吏部員外郎と爲る。玄宗太子と爲り、宮僚を遴選し、曾を以て舍人と爲す。(中略)俄かに中書舍人に擢んでらるるも、父の嫌名(父の名、言忠の忠が中書舍人の中と音通)を以て拝さず、諫議大夫・知制誥に徙る」とある。景雲は、睿宗の年号(七一〇—七一二)。また賈曾伝に附された賈至の伝に「至、字は幼鄰。明経の第に擢んでられ、褐を單父の尉に解く。玄宗、蜀に幸するに従ひ、起居舍人・知制誥を拝す。帝、

位を伝へ、至、冊を譲するに当たり、既に襲を進む。帝曰く、昔、先天の詰命は、乃の父之が辞を為る。今茲の命冊は、又た爾之を為る。兩朝の盛典、卿が家の父子の手に出づ。美を継ぐと謂ふ可しと。至、頓首し、流涕鳴咽す。中書舍人を歴す」云々とある。

(注38) 顧宸『註解』に「賈が詩に鳳池の二字有るに因つて、公遂に云ふ、池上今に于いて鳳毛有りと。蓋し世よ糸綸を掌るは、賈氏のみ然りと為す。賈が鳳池は、泛く鳳凰池を言ふに過ぎず。而して公の属和、遂に賈氏父子を鑒定し、移し易へて以て他人に和す可からず。公の詩独歩する所以なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注39) 王維(字は摩詰、七〇一―七六二)が唱和した詩は、次の如くである。当時、王維は中書舍人(正五品上)であった。

絳幘鶴人報曉籌 絳幘の鶴人 曉籌を報じ
尚衣方進翠雲裘 尚衣 方に進む翠雲裘
九天闔闔開宮殿 九天の闔闔 宮殿開き
萬國衣冠拜冕旒 萬國の衣冠 冕旒を拜す
日色纔臨仙掌動 日色纔に仙掌に臨んで動き
香煙欲傍袞龍浮 香煙袞龍に傍ふて浮ばんと欲す
朝罷須裁五色詔 朝罷みて須らく五色の詔を裁すべし
珮聲歸向鳳池頭 珮聲歸り向ふ鳳池の頭

(注40) 岑參(七一五―七六九)が唱和した詩は、次の如くである。当時、岑參も同じく中書省に属する右補闕(従七品上)の任にあった。なお、これは杜甫らの推薦によるもの。011「省中の院壁に題す」詩の(注3)参照。

鷄鳴紫陌曙光寒 鷄は紫陌鳴いて曙光寒く
鶯囀皇州春色闌 鶯は皇州に鳴いて春色 闌なり
金闕曉鐘開萬戶 金闕の曉鐘 万戸を開き
玉階仙仗擁千官 玉階の仙仗 千官を擁す
花迎劍佩星初落 花は劍佩を迎へて星初めて落ち
柳拂旌旗露未乾 柳は旌旗を払ひて露未だ乾かず
獨有鳳凰池上客 獨り鳳凰池上の客有り
陽春一曲和皆難 陽春一曲 和すること皆難し

《糸綸》は、制詰のこと。『礼記』に「王言は糸の如し、其の出づること綸の如し」と。《美》は、父子で美を継ぐこと。『左伝』に「世

よ其の美を済す」とあり、《世》《美》の字は、これに基づく。《池》は鳳凰池、中書省のこと。『晋書』に「荀勗が中書監から尚書令に昇進した。人がおめでとうと言うと、荀勗曰く、わしの鳳凰池を奪われて、何のめたいことがあるものかと」。けだし中書省は幽邃の地にあるので、天上の鳳凰池に比すのである。『南史』に「宋の謝鳳の子、超宗には文辞の才があった。孝武帝がその文章を見て、嘆賞して言った。超宗には特別に鳳毛があると」。その父の文才を受け継いだことをいい、父の名に因んで鳳の羽毛に比したのである。公の自注に「舍人の先世、嘗て糸綸を掌る」と。『唐書』を按ずるに、「賈曾は景雲年間に中書舍人に拔擢された。子の至が天宝末にまた中書舍人を拜命し、父子で美を継いだのを明皇がかつてこれを称えた」とある。ここではさらに押し広げてあまねく世人に向つて推称してゐるのである。賈氏が詔詰を掌り、代々その《美》を済すことの盛んなるを知ろうとすれば、鳳凰池の上、貴要の地において、《美》も《鳳毛》がちゃんと受け継がれており、ただその父だけではないことをとくと見なければならぬ。この篇の前半四句は《早に大明宮に朝す》ことで、後半四句は《賈舍人》を称えたものである。第五句は、朝廷より退出することを言い、上に述べたことをまとめ以下を導き出している。第六句は、《舍人》に詩が有ることを言い、それについて讚美している。結びでは、さらに拈上げて父子が《美》を継ぐことの盛んであるのを讀えており、先代にまで説き及ぼしているのは、手厚いかぎりである。顧修遠の註に云う、「賈至の原作に《鳳池》の二字があることから、公はこれをふたつに分けて用い、父子が美を継ぐことを讀えている。けだし代々《糸綸》を掌つたのは、ただ賈氏だけがそうであった。王維と岑參の唱和した作に同じくどちらも《鳳池》の語を用いているが、いずれも一般的に中書省を指して言うに過ぎず、雷同を免れぬ。しかるに公はそれで父子を称し、移し易えて他人に唱和することはできない。これぞ公の詩が独歩し

て世に並ぶ者のないわけだ」。

009 宣政殿退朝晩出左掖

掖音奕、正門旁下小門也。^(注1)漢書注掖門在兩旁、若二人之臂腋也。唐中書門下兩省在宣政殿門左右。門下省在左、故謂之左掖。公爲拾遺、屬門下省。此詩朔或望、早朝宣政殿、朝罷歸入左省、與同僚共修職、及晚退出而還私第也。

(注1) 例え、『広韻』に掖字に注して「一に曰く、正門の旁の小門なり」と。
(注2) 輯註(巻四)に挙げ、宇都宮遯庵の増広本に引く。『漢書』巻十、成帝紀、建始三年の条、唐・顔師古の注に「掖門は兩旁に在り、人の臂腋の如くなるを言ふなり」と。

〈掖〉、字音は奕、正門わきの小門である。『漢書』の注に「掖門は、兩脇にあり、人体でいえば腋のようなものである」と。唐代、中書・門下の兩省は、宣政殿門の左右にあり、門下省は左側にあつたので、これを〈左掖〉という。公は、拾遺となり、門下省に属した。この詩は、月の朔もしくは望に、朝早く宣政殿に参内し、朝儀が終わつてから左省たる門下省に入り、同僚とともに職務を執り、〈晩〉になつて退出して私邸にもどるのである。

天門日射黄金榜 春殿晴曛赤羽旗

※射：テラス 曛：カ、ヤク

射謂斜照。黄金榜、謂金装門扁。蓋殿門揭額以金塗字。朝日纔上、便先映射也。曛、日入餘光。此猶言耀也。
一作：熏。言若發香然也。赤羽旗、卽朱雀之畫旗。諸旌旗中、此尤燦爛。故特言之。一聯言殿廷文物、朝景日晡也。
(注3) 『集韻』平声二、文韻に「曛は、日入る餘光」と。『古今韻會舉要』巻五も同じ。『韻會』は、宇都宮遯庵の増広本に引く。

(注4) 錢注(巻十)及び輯註に「一に熏に作る」と。輯註は、宇都宮遯庵の増広本もこれを挙げる。

(注5) 『唐詩解頤』に見える。

(注6) 曙は、『集韻』に「大目なり」とあるが、それでは意味が通じにくい。目にみちることを言うのであろうか。

〈射〉は、斜めに照らすこと。〈黄金榜〉は、黄金で裝飾された門匾のこと。けだし殿門には額を掲げ金で文字を塗つてあるのだろう。朝日が少しでも昇ると、すぐにまず光にきらめくのである。〈曛〉は、日が沈む時の餘光。ここは、耀くと言うのとほぼ同義。一に熏に作る。匂いたつようであるのを言う。〈赤羽旗〉は、朱雀の描かれた旗。さまざまな旗のなかで、これがとりわけきらきらと輝いている。それで特に言う。この一聯は、殿廷の文物で朝の景色の目に映つたものを言う。

宮草霏霏承委佩 爐烟細細駐遊絲

※宮草：カラシバ 霏霏：ヒラ／＼ 細細：チラ／＼

霏當作菲。菲菲嫩草盛貌。承、受也。委佩、謂佩玉之垂下也。曲禮主、佩垂、則臣、佩委。蓋朝禮所立庭上、細草鋪地、如毯。其向殿、拜伏、佩隨委地、而草便受之、如相持者也。爐烟、御爐香烟。唐書儀衛志、朝日、殿上設熏爐香案。遊絲、一名陽焰。春空搖曳之氣、乍散乍聚者。此則長在、故曰駐。言庭上御爐香烟、裊裊如縷而上、繫住遊絲、而令不散也。其實、爐烟上而不絕、停駐空中、如遊絲爾。蓋御爐在階前之庭也。一聯以俯仰爲對、見晴景和暄、天靜無風。

(注7) 〈霏霏〉、錢注は〈微微〉に作り、「一に霏霏と云ふ」と。輯註も同様。
(注8) 釈大典『唐詩解頤』に霏字の下に注して「通霏非」と。なお、明・万曆四十六年(一六一八)刊の坊刻本『新刻李袁二先生精選唐詩訓解』(巻五)は〈霏霏〉を〈菲菲〉に作る。この『唐詩訓解』には、寛文年間(一六六一〜一六七二)以前に刊行された和刻本がある。ちなみに、李は李攀龍(字は于鱗、号は滄溟、一五一四〜一五七〇)、袁は袁宏道(字は中郎、一五六八〜一六一〇)のことで、その名に偽託したもの。江戸初期にお

る『唐詩訓解』の受容については、日野龍夫校注『唐詩選国字解1』（平凡社東洋文庫、一九八二年）解説参照。

(注9) 何か基づく所あるのか、不明。

(注10) 『礼記』曲礼下に「主の佩^ル倚^レれば、則ち臣の佩垂^ルれ、主の佩垂^ルるれば、則ち臣の佩委^スす」と。倚は身体につき、委は地面につくこと。

(注11) 008 「賈至舍人早に大明宮に朝するを奉和す」詩の(注30)参照。

(注12) 『唐詩解頤』に初唐・盧照鄰の「長安古意」に見える〈遊糸〉の語に注して、「春日晴^ル時、空中搖曳之氣」という。しかし実際は、「くもや小虫などが始めてかえったときについた細い糸が無数に空中に飛びただようもので、春の景物になつてゐる。日本では比較的すくないので、よく陽炎（水蒸気の作用で生ずる現象）のこととまちがえられている」（集英社漢詩大系6『唐詩選』、斎藤明訳注）。このこと、川口久雄『かげろふ日記』の書名について「（かげろふ）の語義とその変遷」（『西域の虎—平安朝比較文学論集』収録、吉川弘文館、一九七四年）に指摘。なお、顧宸の『註解』には「蛛糸の遊散する者」という。

〈霏〉は、当然〈菲〉に作るべきだ。〈菲非〉は、若草がやわらかに萌えるさま。〈承〉は、受である。〈委佩〉は、佩玉が垂れ下ることである。『曲礼』に「主の佩垂るれば則ち臣の佩委す」と。けだし朝礼で立つ庭には、細い〈草〉がびっしりと地面を敷きつめ、毛氈のようであつたのだらう。宮殿に向かって拝伏すると、佩玉がそれにつれて地面に〈委〉し、〈草〉がこれを受けて、待ち構えているようである。〈爐烟〉は、御炉の香烟。『唐書』儀衛志に「朝の日には殿上に熏爐・香案を設ける」とある。〈遊糸〉は、一名陽炎。春空にただよう気で、むらがつたかと思うとあつという間に散ずるもの。ここでは長くとどまっているので〈駐〉という。その意味は、殿庭の上にある御炉の香烟がゆらゆらと細い糸のように立ち上り、〈遊糸〉を繋ぎとめて散らさないようにしているということである。実際は、〈爐烟〉が絶え間なく上がり、空中にとどまって〈遊糸〉みたいであるのだ。けだし御炉は、階前の庭にあるのであらう。この一聯は、俯して見たものと仰いで見たものとを対偶にしている。晴れわたつ

た景色はのどかで暖かく、穏やかで風ひとつないことがみてとれる。雲近^{ニテ}蓬萊^ニ常^ニ五色^ニ 雪殘^ニ鵲^ニ亦多時^ニナランヤ

※多時：ホドナカラン

蓬萊ハ即大明宮。高宗ノ時改テ曰蓬萊宮ト。取テ殿後ノ蓬萊池ヲ爲レ名ト。以擬ニ海上ノ仙山ニ。後ニ復爲ニ大明宮ト。此仰見朝霞映^レ宮ニ、因テ言。雲成ニハ五色ヲ、仙實ノ瑞氣、以其近^ニ蓬萊ニ、故ニ常ニ然也。常ニ者不^ニ獨今朝ノミナラ也。沈約^ハ宋書^ニ慶雲五色者、太平之應也。暗ニ用^ニ此意^一以寓祝。鵲^ハ漢ノ宮觀^ニ名。借用^テ以對^ニ蓬萊^ニ。謂^ニ深宮殿閣^一。亦多時ハ加^ニ豈^ニ字^一看。言^レ當不^{シテ}日ヲ消融^ニ也。二聯皆自「春晴」二字一來。朝廷閒暇、瑞日照熙、泰平ノ氣象、寫^シ出シ盡^リ矣。

(注13) 〈五色〉、錢注及び輯註は〈好色〉に作る。

(注14) 008 「賈至舍人早に大明宮朝するを奉和す」詩の(注6)参照。

(注15) 『史記』秦始皇本紀および封禪書に、渤海にあるという三神山の一つとして蓬萊の名を挙げる。

(注16) 梁・沈約(四四一〜五一三)の『宋書』卷二十九下、符瑞志下に「雲に五色有る、太平の応なり。慶雲と曰ふ。雲の若くして雲に非ず、煙の若くして煙に非ず、五色紛縈、之を慶雲と謂ふ」と。

(注17) 前漢・司馬相如「上林の賦」(『文選』卷八)に「石闕を躋し封巒を歴し、鵲を過ぎり露寒を望む」とあり、張揖の注に「此の四觀(石闕・封巒・鵲・露寒を指す)は、武帝建元中に作る。雲陽甘泉宮外に在り」と。

(注18) 『夜航詩話』卷五に同様の指摘がある。

(注19) 『唐詩集註』卷五に、この詩を載せ、「中ノ四句、応ニ春晴ニ」と。

〈蓬萊〉は、即ち大明宮のこと。高宗の時、改めて蓬萊宮といった。宮殿の背後にある蓬萊池から取つて名づけられたのである。東海上にある仙山の名に擬えた。後に再び大明宮とした。これは仰いで朝がたの赤い雲気が宮殿に映じているのを見て、それで言う。〈雲〉が〈五色〉をなしているのは、仙界の瑞兆の気で、〈蓬萊〉に近いことから、いつもそうなのである。〈常に〉とは、今朝のみに限ったこと

ではないのである。沈約の『宋書』に「慶雲が五色であるのは、太平の応徴である」と。暗にこの意を用いて祝意を寓している。〈鵲鵲〉は、漢の宮殿の名。借用して〈蓬萊〉と対にしている。深宮の殿閣のこと。〈亦多時〉には、豈の字を加えて看よ。きつと日ならずして消え溶けてしまいうに違いないことを言う。以上の二聯は、いずれも〈春〉〈晴〉の二字から来たものである。朝廷はのんびりとして何事もなく、めでたき陽光がうらうらと照らす。泰平の氣象をすつかり描き尽している。

侍臣緩歩 歸青瑣 退食從容 出 毎二遲シ

※緩歩：シツ／＼ト 從容：ユツタリ 毎：イツノヒモ

侍臣ハ公自謂。青瑣ハ既見。歸ニ青瑣ヨリ言出殿門而歸ラ省ニ也。

退食亦既見。從容ハ從ニ任セテ其容止ニ急遽ニ也。不レシテ曰ニ退食

委蛇ニ而易。以ニ從容ラ者ハ、天台山ノ賦ニ任ス緩歩之從容ニ、分ニ用之

二句ニ也。出ハ出ニ左掖ニ也。毎ハ毎日也。遲ハ及レ晚ニ也。蓋朝罷退

入ニ左省ニ、遲日悠悠、在省ニ修職ヲ、及レ晚ニ出ニ掖門ニ而還ニ私第

ニ。竝ニ緩歩從容トシテ無復急遽之忙ニ。時適ニ天下泰平、朝廷無事、

有ニ羔羊之風ニ也。虞伯玉云、前六句ハ皆賦ス宣政朝會之時所ニ見、

第七句方ニ言ニ退朝歸ニ省ニ。結句乃言ニ晚ニ出還ニ家ニ而全題完

具ス矣。郭彥深云、妙在ニ緩歩從容ニ。前六句已ニ有此意況。微吟

自知。冰川詩式云、此詩ハ藏頭格也。首聯與ニ中二聯ニ六句皆具

ニ言ニ所ニ遇之景與ニ情、而不レ言ニ題意。至ニ結聯ニ方ニ說ニ題之意

一、是謂ニ藏頭。案ニ非ニ初ニ有ニ是格、此詩自然ニ如是爾。

(注20) 邵宝『集註』卷二十二、宮室類及び薛益『分類』卷一、宮殿などに指摘。

(注21) 訳注稿(二)、004「猷納使起居田舍人澄に贈る」詩の詳解に見える。その(注

23) 参照。

(注22) 訳注稿(二)、004「猷納使起居田舍人澄に贈る」詩の詳解に見える。その(注

16) 参照。

(注23) 『史記』留侯世家に「張」良嘗て間に從容として下邳の圯上を歩游す」

とあり、唐・司馬貞の索隱に「從容は、其の容止に従任して、矜莊ならざるを謂ふなり」と注す。

(注24) 『詩経』召南・羔羊に「退食公自りす、委蛇委蛇たり」と。

(注25) 東晉・孫綽「天台山に遊ぶ賦」(『文選』卷十一)に「心目の寥朗を恣にし、緩歩の從容に任す」と。

(注26) 『詩経』豳風・七月に「春日遲遲たり」とあるのに基づく語。

(注27) (注24) 参照。『唐詩訓解』に「朝を罷め省に帰り、晩にして食に退く。從容此の如し。信に羔羊の遺風有り矣」と。

(注28) 玉は生の誤り。虞伯生は、元・虞集(字は伯生、一二七二—一二四八)のこと。その名を冠した「杜律虞註」は、後世の偽託。寛文八年(二六六八)刊の和刻本があり、『唐詩集註』にも引く。

(注29) 明・郭濬(字は彦深)のこと。明・高棟(字は廷礼、一三五〇—一四二二)輯選『唐詩正声』に評点を加えた『増訂評註唐詩正声』十二巻がある。その説は、『唐詩集註』に引く。

(注30) 明・梁橋(字は濟甫、号は冰川子)撰。全十巻。嘉靖二十四年(二五四五)の自序を附す。万治三年(二六六〇)刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集第十七集』に影印を収む。その藏頭格の条に、「藏頭は、首聯と中二聯と六句皆具に寓する所の景と情とを言ひて題意を言はず。結聯に至つて方に題の意を説く。是れを藏頭と謂ふ。此れ帰題と同じからず。帰題は、結聯に明らかに題の字を用ふるなり。藏頭は、結聯に暗に題の事を用ふるなり」とした上で、五律「晩に左掖を出づ」詩とこの詩とを例に挙げる。前者については、後出010「紫宸殿退朝の口号」詩の(注8)参照。

〈侍臣〉は、公自らの謂。〈青瑣〉は、既に前に見える。〈青瑣より帰る〉は、〈宣政殿〉の門を出て門下省に帰ることを言うのである。〈退食〉も、やはり既に見える。〈從容〉は、自然な身のこなしに任せてあわただしくしないことである。「退食委蛇」と言わずに、〈從容〉と言ひ換えているのは、「天台山の賦」に「緩歩の從容に任す」とあるのを、二句に分けて用いたのである。〈出〉は、〈左掖〉を出るの

である。〈毎〉は、毎日である。〈遲〉は、晩に及ぶことである。けだし朝会がおわり退出して左省に入り、のどやかな春の日をのんび

りと、省内で職務を執る。時に天下泰平で、朝廷には何事もなく、『詩経』羔羊の遺風がある。虞伯玉「生」が云う、「前の六句はいずれも〈宣政殿〉での朝会の時に見たことを直叙し、第七句でちょうど〈朝より退き〉て門下省に帰ることを言い、結句でやっと〈晩に出て〉家にもどることを言っており、詩題に述べられていることが全部すっかり具わったことになる」。郭彦深が云う、「妙は〈緩歩〉〈従容〉にあるが、前の六句にもうこの趣意が含まれており、微吟すると自ずと分かる」。『冰川詩式』に云う、「この詩は蔵頭格である。首聯と中間の二聯との六句は、いずれもつぶさに景と情を言うが、題意を言わない。結びの聯に至ってやっと題意を説いている。これを蔵頭という」。案ずるに初めからこのスタイルがあるわけではなく、この詩は自然にそうなったのである。

010 紫宸殿退朝ノ口號

紫宸殿ハ在ニ宣政殿ノ後ニ。常日御シテ之ニ見ル羣臣ヲ。古之燕朝也。故ニ所ノ詠スル景境、與ニ宣政殿ノ自別。讀者詳ニセヨ之ヲ。號平聲、呼也。口號ハ謂ニ隨テ口ニ號吟スルヲ也。

(注1) 号は下平声豪韻。顧宸『註解』に「説文に曰く、号は呼なり。口号は口に随つて号吟するを言ふなり」と。宇都宮遼庵の両者にも引く。

〈紫宸殿〉は、宣政殿のうしろにある。常の日には、ここにお出ましになり、群臣を引見される。古の燕朝である。されば詠じられている景境は、前詩の宣政殿とは自ずと異なる。読者は、この点をしっかりとみておくことだ。〈号〉は平声、呼である。〈口号〉は、口から出るままに号吟することである。

戸外ノ昭容紫袖垂ル 雙瞻御座ヲ引ニ朝儀ヲ

※袖：フリソデ 御座：タカミクラ

昭容、女官位、正二品。爲リ九嬪之第二。唐ノ制、天子臨レ朝、宮人引至ニ殿上ニ、左右相竝ニ、面シテ内御行、以ニ雉尾扇障ニ翳ス

顔一。陸座之後乃開去。不レ欲セシ使コトヲ衆人ヲシテ見ニ宸儀升降之容一也。垂ハ謂ニ簾袖ヲ也。百官列ニ立シテ庭上ニ、刮目ヲ以待ニ朝儀一。既ニシテ而天子出御、便先認下昭容垂ニ紫袖一而出上。先見ニ於戸外一者ハ、以ニ其先ニ于天子ニ也。引ハ導引也。朝儀ハ謂ニ天子臨レ朝ニ儀容一。宸儀既ニ臨ニ殿上ニ、兩昭容引導ニ以赴ニ御座ニ也。

(注2) 『新唐書』卷四十七、百官志、内官の条に「唐、隋制に因り、貴妃・淑妃・德妃・賢妃有り。各々一人、夫人と爲す。正一品。昭儀・昭容・昭媛・修儀・修容・修媛・充儀・充容・充媛、各おの一人、九嬪と爲す。正二品。婕妤九人、正三品。美人四人、正四品。才人五人、正五品。宝林二十七人、正六品。御女二十七人、正七品。采女二十七人、正八品」と。

(注3) 『唐詩訓解』に「御座を双瞻すとは、両昭容、内に面して却行するなり」と。『唐詩集註』も同じ。

(注4) ちなみに、023「至日興を遣る。北省の旧閣老・両院の故人に奉寄す」二首其二の領聯に「麒麟動かずして爐烟上がり、孔雀徐く開いて扇影還る」とあり、東陽の詳解に「孔雀は文禽。其の尾を縋めて扇と爲す。天子殿に升る、両昭容、扇を以て擁障す。詳らかに前に見ゆ。旧、雉尾扇を用ふ。開元の初め、改めて繡孔雀を用ふ。孔雀徐く開いて扇影還るは、宸儀坐定まて、乃ち徐くに開き分かれ、是に於いて竝に捧げて退き還つて内に入るなり」という。

また097「秋興」八首其五の頸聯に、「雲移りて雉尾宮扇を開き、日繞りて龍鱗聖顔を識る」とあり、詳解に「雉尾を織つて扇と爲す。出御の儀衛、詳らかに前に見ゆ。宸儀坐定まて、乃ち開き去る。許渾が早朝に云ふ所の雉尾才に分かれて玉旒を見る。朝班殿陛の下に在つて之を仰望す、彩雲の移り動くが如し」云々という。許渾（七八八・八六〇）の作は「秋日早に朝す」詩（『全唐詩』卷五三三）の第六句。『唐詩實珠』卷二、帝京二にも載せる。

〈昭容〉は、女官の位で正二品。九嬪の第二位である。唐の制度では、天子が朝に臨まれる際、女官が先導して殿上に登る。左右に相並んで内に向つて却き、雉尾扇で天顔を蔽ひ隠す。玉座にのぼられた後ようやく開く。衆人に昇降するお姿を見せたくないものである。〈垂〉

は、たれさがった袖のこと。百官は庭上に整列して、目をこすり注意深く〈朝儀〉を待つ。やがて天子が出御なされると、さっそくまず〈昭容〉が〈紫袖〉を〈垂〉れて出てくるのが認められる。まず〈戸外〉にあらわれるのは、天子に先立って出てくるからである。〈引〉は、導き引くことである。〈朝儀〉は、天子が朝廷に臨まれる儀容のこと。天子が殿上に臨まれると、二人の〈昭容〉が先導して御座に赴くのである。

香飄^ニ合殿^ニ春風轉^シ 花覆^ニ千官^ヲ淑景移^ル

※合殿^ニゴテンザウ 転^ニメグリマハル 淑景^ニヒアシ

香^ハ言^ハ御爐^ノ香氣^ヲ。合^ハ滿^也也。合殿^ハ即合座合家之義。御香之氣飄^リ度^ニ殿中^ニ、春風吹轉^{シテ}無^レ所^ニ不^レ至^也也。顧註^ニ云、前詩爐煙細細駐^ハ遊絲^ヲ。善^ク寫^ニ無^レ風之妙^ヲ、此^ハ則善^ク寫^ニ有^レ風之妙^ヲ、各極^ニ精工^ヲ矣。覆去聲、言^ハ庭花掩^ニ映^{スル}衣冠^ニ也。公又有^ニ退朝花庭^ニ散之句^ヲ。殿庭花枝之盛^{ナル}、可^ニ以想見^ニ已^レ淑和也。春天^ノ和氣^ヲ、以淑稱^ス之。日光^ヲ曰^レ景。與^レ影不^レ同。移^ハ言^ハ待^レ朝^ニ良久^ヲ、日晷漸^ク移^ハ。蓋日既^ニ高^ク昇也。

(注4) 『唐詩解頤』に合字の下に注して、「猶言^ハ滿^ト」と。但し、吉川幸次郎『杜甫詩注』第五冊には「合殿」とは、奥深い内殿の意」とし、「南朝の史書にもその語見え、『資治通鑑』宋紀、元嘉三年また三十年の胡三省注は、李延寿の説によつて、その意味を説く」との指摘がある。

(注5) 顧宸『註解』。宇都宮遯庵もこれを挙げる。

(注6) 去声のときは、蓋う意。字音はフ。

(注7) 『唐詩訓解』に「宮花日に向て朝班に掩映す」と。

(注8) 「晩に左掖を出づ」詩(詳註卷六)に、次のように見える。

晝刻傳呼淺 晝刻 伝呼浅く
春旗簇仗齊 春旗 簇仗齊し
退朝花底散 退朝 花底に散じ
歸院柳邊迷 歸院 柳邊に迷ふ
樓雪融城濕 樓雪 融けて城湿り
宮雲去殿低 宮雲 去つて殿低し

避人焚諫草 人を避けて諫草を焚く
騎馬欲鷄棲 馬に騎れば鷄棲ならんと欲す

(注9) 例えば、『字彙』に「善なり、和なり」と。

(注10) 『唐詩訓解』に「纂要に日光を景と曰ふ」と。『唐詩集注』も同じ。ちなみに、『說文解字』七篇上に「景、日光なり」とあり、段注に「後人、陽に名づけて光と曰ひ、光中の陰に名づけて影と曰ふ。別に一字を製して、義を異にし音を異にす」と。但し、仇兆鰲は、「景」字の下に「影と同じ」と注する(詳註卷六)。

〈香〉は、御爐の香氣をいう。〈合〉は、満である。〈合殿〉は、即ち合座・合家の意。御香の氣が殿中に〈飄〉^{ヒアス}りただよいわたる。〈春風〉が吹き〈転〉じて、至らぬところがないのである。顧註に云う、「前詩の〈爐煙細細遊糸を駐む〉は、風のない状態をめぐりに写し出し、ここでは風の有る状態をめぐりに写し出して、それぞれ精巧を極めて」と。〈覆〉は、去声。殿庭の花が衣冠に掩いかぶさっているのを言う。公にはさらに「退朝花庭に散ず」の句がある。殿庭の花枝の盛んなさまを想像できようというものだ。〈淑〉は、和である。春の和やかな氣を〈淑〉の語で称する。日光を〈景〉という。影と同じではない。〈移〉は、朝廷に侍することやや久しく、日影がしだいに移ることを言う。けれど、日がもうすでに高く昇っているであろう。

晝漏稀^ニ聞^ニ 高閣^{ヨリ}報^シ 天顔有^テ喜近臣知^ル

※晝漏^ニトキノタイコ 報^ニシラセ

高閣^ハ謂^ニ鼓樓^ヲ。高閣^ハ報^ス言^ハ漏鼓之聲自^ニ高閣^ノ響^キ聞^ル上^ヲ。時春日遲遲^ニ、故^ニ漏聲稀疎^ニ、久^{シテ}而後聞^ル也。内廷深邃、朝儀肅靜、言外可想也。近臣知^ハ言^ハ下^ニ末班^ニ者^ハ不^レ上^レ能^レ知^{コト}也。此蓋吾王庶幾^ハ無^ニ疾病^ノ與^ニ之意。公爲^ニ拾遺^ノ、咫尺^ニ天顔^ニ、見^ニ其有^テ喜色^ヲ、心竊^ニ悅^ニ而慶^{スル}也。

(注11) 009 「宣政殿退朝晩に左掖を出づ」詩の(注26)参照。

(注12) 『唐詩解頤』に「晝漏稀聞」の句に注して「言^ハ日永^{シテ}漏声之稀疎^{ナル}」

也」と。

(注13) 邵宝『集註』卷二十一、宮室類に、この詩を載せ、「聞くこと稀とは、

紫宸の内衙昼漏の時刻、必ず外廷高閣の報を待つことを謂ふ。以て内廷の深遠なるを見ずなり」と。

(注14) 『孟子』梁惠王下に見える。わが王には、つつがなくいらつしやるらしいの意。

〈高閣〉は、鼓楼のこと。〈高閣より報ず〉は、漏鼓の音が高閣より響き聞こえて来るの言う。時に春の日あしはのどかで、漏声は間遠にして、しばらくたつてから聞こえてくるのである。内廷の奥深く幽邃なことや、朝廷の儀式の静肅なること、言外に想像できよう。〈近臣知る〉は、末班にある者は知ることができないことを言うのである。これは、けだし「吾が王庶幾くは疾病無からんか」の意であろう。公は拾遺となつて天子のごくお側近くにいる。その喜色あるを見て、心ひそかに悦んで慶賀するのである。

宮中 毎三日出歸東省 會送夔龍集鳳池

※夔龍：オモヤクシユウ

門下省在宣政殿門ノ左、故謂之左省、亦曰東省。會送ハ會合シテ相送也。會訓ニ時適ト謬矣。夔龍ハ舜ノ二臣ノ名。借稱ニ宰相之賢。書ノ舜典ハ夔典ハ樂ヲ龍ハ作ニ納言ト。事物紀原ハ舜ノ納言ハ中書令之任也。然則雖夔龍連稱、然龍字所レ指爲重シト。送ノ字亦專係ニ中書令ニ。鳳池ハ中書省、既見ニ于前ニ。稱ニ省地之貴也。唐ノ制、尙書中書門下謂之三省。三省ハ長官ヲ爲ニ宰相ト。而中書ハ乃政事堂ノ所在爲ニ最尊シト。故ニ毎三日出シテ宮中ニ而還上、輒必與三省ノ羣僚俱ニ從ニ相公ニ至ニ中書ニ就ニ政事堂ニ集議シ朝政ヲ然シテ後乃始歸ニ東省ニ。其得ニ參預ニ大政ニ、自喜ニ榮幸之盛ナル也。用ニ龍鳳ノ字ニ對映シテ弄巧ヲ、壯麗ニシテ體裁ヲ、勻ニ稱ニ章法ヲ。且龍ノ字與ニ池通氣ヲ、作者心細ナル如髮ノ不可ニ膚視ス。前六句言「朝會之景」與「事」、結方「言退朝」亦藏頭格也。通篇敘ニ遇

レ時ニ得レ意ヲ之趣ヲ、或ハ以爲嘆「倦遊」之辭ト、昧ニ乎詩ニ之甚也。

宮嬪女職、本備「内任」、乃人主坐朝、引至「殿上」、尤失「於風流」矣。至「昭宗」天祐間、詔「罷之」。只令「小黃門」祇候引從

「宮人不」得「擅出」内。於是禮始「正也」。○大明宮以下三首、典雅重大、何等筆力。唐廷全盛景象、宛然「在目中」矣。

(注15) 『唐詩解頤』に「會」字を「たまたま」と訓じ、「時適」と注する。

(注16) 『尚書』舜典に「帝曰く、夔、汝に命じ樂を典らしむ。胄子を教へよ。(中略)帝曰く、龍、朕議説行を殄ち、朕が師を震驚するを墮む。汝に命

じて納言と爲す。夙夜朕が命を出納し、惟れ允なれ」と。

(注17) 北宋・高承撰。全十卷。鵝飼石齋点による明暦二年(一六五六)刊の和刻本がある(汲古書院『和刻本類書集成』第二輯に影印を収む)。その巻五、中書令の条に「舜の納言、周の内史は皆中書の任なり」と。宇都宮遯庵の増広本にもこれを引く。

(注18) 009 「宣政殿退朝晩に左掖を出づ」詩。

(注19) 『唐詩解頤』に「中書ハ政事堂ノ所在、故ニ時ニ從ニ諸官ニ而集議ニ朝政一也」と。盛唐・李華(七一五〜七六六)の「中書政事堂の記」(『全唐文』卷三一六)に拠れば、政事堂は唐初の武徳以来、門下省にあつたのを、高宗の光宅元年(六八四)、裴炎が中書令に除せられて後、これを中書省に遷したという。なお、結句について、鈴木虎雄『杜少陵詩集』には、「會送す夔龍の鳳池に集まるを」と訓じ、「このとき唐の政事堂は中書省にあり、故に宰相等そこに集まるなり、而して作者等自己の本省にかへらんとしてその人人を會送するなり」と説く。吉川幸次郎『杜甫詩注』も同様の解釈。

(注20) 細心の上的ないこと。明清の成語。ちなみに、清・易本煥『常語授』(汲古書院『明清俗語辭書集成』第一輯所収)巻二、雅類に、この語を載せ、「六韜に、飛將の才、心細なること髪のごく、肝大なること斗の如し」と注するが、『六韜』にこの語は見えない。

(注21) 『唐詩集註』に引く明・蔣一葵の説に「前六句言「入朝之景」與「事」、結言「退朝ノ事」」と。

(注22) 例えば、『唐詩訓解』には「蓋し公、拾遺と爲り、本と宜しく君に親しむべきに位卑しく分疎なるを以て、近づくことを得ず。故に建明する所無

く而して班に随つて碌碌たり。良に嘆ず可し。豈に帝龍やうりゅう浸く衰ふるの時ならんか」という。この箇所、宇都宮遼庵の詳説にも引く。

(注23) 『唐会要』卷三に「其の年(天祐二年「九〇五」)勅す、宮嬪女職、本と内任に備ふるに、近年以来、稍や礼儀を失す。今後延英殿坐朝の日に遇ふ毎に、只だ小黃門をして祇候引従せしめ、宮人きん擅に内を出ることを得ざらしむ」と。

なお、『夜航詩話』卷二に、清・王阮亭(名は士禎、別号漁洋山人。一六三四〜一七一)『香祖筆記』卷六の「杜詩、戸外の昭容紫袖垂ると。蓋し唐の制に、天子朝に臨む、則ち宮人を用ひ引いて殿上に至る。天祐二年に至り、始めて詔して之を罷む。是れ全盛の時、反つて衰乱の朝の礼に合ふと為すに如かざるなり」云々というのを挙げる。

門下省は宣政殿門の左側にあり、それでこれを左省といい、〈東省〉ともいう。〈会送〉は、会合して送ることである。〈会〉を「時適」と訓ずるのは誤っている。〈夔龍〉は、舜の臣下二人の名。借用して宰相の賢なるを称する。『尚書』舜典に「夔は樂を典り、龍は納言と作る」、『事物起原』に「舜の納言は中書令の任である」と。そうすると〈夔龍〉と連称してはいるけれども、〈龍〉字の指す意味の方が重い。〈送〉字もやはり専ら中書省にかかる。〈鳳池〉は、ほかならぬ中書省のこと。既に前に見える。省の所在地が尊貴なことを称するのである。唐代の制度では、尚書・中書・門下を三省という。三省の長官を宰相とし、そうして中書省は政事堂のある場所、最も尊ばれた。されば〈宮中〉を退〈出〉してもどる〈毎〉に、三省の属僚たちと一緒に相公について中書省に赴き、政事堂で朝政を審議し、その後やつと〈東省〉に〈帰〉るのだ。大政に参与することができ、自ら榮幸の盛んなることを喜んでいるのである。〈龍〉〈鳳〉の字を用い、互いに照応させて技巧を凝らし、体裁を壮麗にして、章法に按配よく適合している。その上〈龍〉字は〈池〉と氣脈を通じており、作者の心配りは毛髪ほどの細密さであつて、上つ面だけを見てはならない。前六句は朝会的情景と事柄とをいい、結びでやつ

と〈退朝〉をいう。やはり蔽頭格である。一篇全体は、時に遇い我が意を得た旨を述べている。或いは倦遊を嘆いた言葉だとする説があるが、詩に味いこと甚だしい。宮女の職は本来後宮内の任務に備えるもの、これがなんと君主が朝に坐すのに殿上に先導するというのは、ことのほか風流に失ってしまうことになる。昭宗の天祐年間に至つて、詔してこれを廃め、ただ小黃門(宦官)に祇候引従させることにし、宮人は勝手に後宮を出ることができなくなった。かくして儀礼はやつと正しくなったのである。○「大明宮」以下の三首は、典雅重大で、何という筆力であらう。唐朝全盛の景象が、ありありと目に浮かぶようである。

011 題_二省中_一院壁_二

題_二門下省中_一諫院之壁_二也。拾遺補闕_二兩職掌_二供奉諷諫_一。大事_ハ廷争_シ、小事_ハ封事。故_ニ其直署曰_一諫院_ト。此詩乃嘆_二倦遊_一之作。蓋公忠言不_レ用_{ラレ}、悠悠不_レ得_レ意_ヲ、無聊之餘、有_ニ是作_一也。此時岑參以_二公_一薦_二爲_二補闕_一。其詩嘆_二不_レ遇_一、亦數數_二矣_一。言路之塞_二可_レ知也。此詩變格、不_レ拘_二聲律_一。

(注1) 『大唐六典』卷八、門下省の条に「左補闕拾遺は、供奉諷諫、乘輿に扈從するを掌る。凡そ令を発し事を挙ぐるに、時に便ならず、道に合せざる有れば、大なるは則ち廷議し、小なるは則ち上封す。若し賢良の下に遺滞し、忠孝の上に聞せざれば、則ち其の事状を条して、之を薦言す」と。

(注2) 邵傳『集解』に「此れ公、志を得ず、院壁に題す」と。

(注3) 至德二載(七五六)六月十二日に左拾遺の裴薦らと連名で出された「補遺の爲に岑參を薦むるの状」(詳註卷二十五)に、次のようにある。

宣議郎試大理評事撰監察御史賜緋魚袋岑參。右臣等、窃かに見るに、岑參は識度清遠、議論雅正にして、佳名蚤に立ち、時輩の仰ぐ所なり。今諫諍の路大いに開くも、献替の官未だ備はらず。恭して惟ふに近侍は、実に茂材に藉る。臣等謹んで閭門に詣り、状を奉り薦を陳べて以聞す。伏して進止を聴かん。

岑参の伝記や参考文献については、小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』（大修館、一九七五年）岑参の条（寛文生執筆）及び松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（同上、一九八七年）『統校注唐詩解釈辞典（付）歴代詩』（同上、二〇〇一年）詩人小伝、岑参の条（いずれも増子和男執筆）参照。

(注4)

例えば、『唐詩選』巻三にも収める「左省の杜拾遺に寄す」詩に、
聯步趨丹陛 歩を聯ねて丹陛に趨り
分曹限紫微 曹を分かちて紫微に限らる

曉隨天仗入 曉には天仗に随ひて入り
暮惹御香歸 暮には御香を惹きて帰る
白髮悲花落 白髮 花の落つるを悲しみ
青雲羨鳥飛 青雲 鳥の飛ぶを羨む

聖朝無闕事 聖朝 闕事無し

自覺諫書稀 自ら覺ゆ諫書の稀なるを
とあり、同じく巻五にも収める「西掖省即事」に、

西掖重雲開曙輝 西掖の重雲 曙輝を開き
北山疎雨點朝衣 北山の疎雨 朝衣に点す
千門柳色連青瑣 千門の柳色 青瑣に連なり
三殿花香入紫微 三殿の花香 紫微に入る

平明端笏陪駕列 平明 笏を端して駕列に陪し
薄暮垂鞭信馬歸 薄暮 鞭を垂れて馬に信せて帰る
官拙自悲頭白盡 官拙くして自ら悲しむ頭の白尽するを
不如巖下偃刑扉 如かず巖下 刑扉に偃するに

という。＊偃字、『唐詩選』は掩に作る。

なお、岑参の集については、寛保元年（一七四一）刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢詩集成唐詩第五輯』に影印を収む。また注釈書として陳鉄民・侯忠義校注『岑参集校注』（上海古籍出版社、一九八一年）、劉開揚箋註『岑参詩集編年箋註』（巴蜀書社、一九九五年）が刊行されている。

(注5)

南宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集卷四十七に「苕溪漁隱曰く、古詩声律に拘せず、唐自り今に至る詩人皆然り。初めより声律を破棄するを待たず。詩に声律を破棄する、老杜自づから此の体有り」とし、この「省中の院壁に題す」詩ほか、「岳を望む」（詳註巻六）、「江雨鄭典設を懷ふ有り」（詳註巻十八）、「昼夢」（同上）、「愁、強ひて戯れに呉体を為す」（同上）

「十二月一日」三首（詳註巻十四）を例に挙げる。なお、杜甫の拗体七律について論じたものに、加藤國安「杜甫の『拗格七律』」（『日本中国学会報』第三十二集、一九八〇年）、金啓華「論杜甫的拗体七律」（『杜甫研究學刊』一九九八年第一期）があるが、後者は未見。

門下省内の諫院の壁に題するのである。拾遺・補闕の両職は、供奉諷諫を掌る。重大案件は朝廷で諫争し、小さな案件は封事する。さればその当直の部署を諫院という。この詩こそ倦遊を嘆ずる作だ。けだし公は忠言が用いられず、鬱々として意を得ないまま、無聊のあまりこの詩ができた。この時、岑参は公の推薦で補闕となつたものの、その詩に不遇を嘆ずること、やはりしばしばである。この詩は変格で、声律に縛られていない。

掖垣竹埤梧十尋 洞門對_レ雷_ニ常_ニ陰陰

※雷：シタマリ

掖垣ハ掖省之垣牆。埤_(注7)音皮、城上之睥睨也。編_(注8)竹ヲ爲_ニ儲胥_一、施_ニ之_ニ掖垣_一上_ニ、若_ニ城埤_一然。故_ニ曰_ニ竹埤_一。王褒_(注9)カ山家詩_(注10)圍_レ竹_ヲ成_レ埤_ヲ、是竹埤ノ所_ニ本_一ツク也。八尺_(注11)曰_ニ尋_一。公送_(注12)賈閭老_(注13)詩_(注14)西掖ノ梧桐樹空_ヲ留_ム一院ノ陰、則_ニ兩省共_ニ植_ニ梧桐_一也。洞_(注15)ハ深也。洞門ハ謂_ニ門深_一シテ如_レ洞_一也。一說_(注16)謂_ニ重門_一也。雷_(注17)一_ニ作_ニル_ハ雪_一、誤也。下_(注18)ニ云落花遊絲乳燕春深_ト、安_レ得_レ有_レ雪耶。吳都賦_(注19)玉堂對_レ雷_ニ。說文_(注20)雷_ハ屋ノ水流也。蓋牆陰洞門深沈_ト而梧桐ノ大樹森_ニ鬱_一其傍_ニ、故院中常_ニ陰陰_一、殆晝欲_レ暗_一也。言外隱然_(注21)見_ニ不得_一意_ヲ之人獨坐_{スル}其中_一矣。

(注6) 錢注（巻十）は、「竹埤」を「埤竹」に作る。

(注7) 輯註（巻四）に埤字の下に「音皮」と注する。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注8) 顧宸「註解」に「竹埤は掖垣の上に竹槍を以て累ねて儲胥を為す。城上の睥睨の若きなり」と。これは、宇都宮遯庵の両著に引く。また釈大典「杜律發揮」に「竹埤ハ謂_ニ編_レ竹_ヲ爲_ニ儲胥_一施_ニ之_ニ掖垣_一上_ニ也」と。儲胥は、防御のための柵。前漢・楊雄「長楊の賦」（『文選』巻九）に見える。睥睨

は、ひめがき。

- (注9) 北周・王褒(字は子淵、五一三?～五七六?)の「従弟祐の山家詩に和す」二首其二(『古詩紀』卷二三)、『漢魏六朝百三名家集』第九十八冊「王司空集」に「衆林積為籟、困竹茂成埤」(衆林積みて籟を為し、困竹茂りて埤を成す)と。これは、輯註に挙げる。宇都宮遯庵の増広本に輯註を引くが、竹字の下茂字を脱す。東陽は増広本に拠ったであろう。なお、王褒の伝記については、興膳宏編『六朝詩人傳』(原田直枝執筆)参照。
- (注10) 「賈閣老の汝州に出ださるを送る」詩(詳注卷六)。

西掖梧桐樹 空しく留む一院の陰
 空留一院陰 空しく留む一院の陰
 艱難歸故里 艱難 故里に帰る
 去住損春心 去住 春心を損なふ
 宮殿青門隔 宮殿 青門隔て
 雲山紫邏深 雲山 紫邏深し
 人生五馬貴 人生五馬貴し

- 莫受二毛侵 二毛の侵すを受くる莫かれ

(注11) 例えば、『大広益会玉篇』に「洞 又た深遠なり」と。

- (注12) 邵宝『集註』卷二十二、宮室類に、この詩を載せ、「洞門は、門の相い当たることを謂ふ。洞、深なり」と。薛益『分類』卷一、省字も同じ。東陽は、この「門相い当たる」意で重門と表現したのであろうか。なお、『漢書』佞幸伝、董賢伝に「重殿洞門」の語が見え、顔師古の注に「門と門と相い当るを謂ふなり」と。『分類』は、宇都宮遯庵の増広本にも引く。

- (注13) 東陽が底本とした邵傳『集解』は「霽」字を「雪」に作る。邵宝『集註』、薛益『分類』も同じ。輯註に「此の詩、雪に対すは、当に霽に対すに作るべし。下に鳴鳩乳燕落花遊糸と云ふ、雪有るに宜しからず」と。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも引く。

(注14) 西晋・左思「呉都の賦」(『文選』卷五)。輯註に挙げる。

(注15) 『說文解字』十一篇下。輯註に挙げる。

〈掖垣〉は、掖省の垣牆。〈埤〉、字音は皮。城壁の上の睥睨である。竹を編んで儲胥とし、〈掖垣〉の上に施してあり、城埤のごとくである。それで〈竹埤〉という。王褒の「山家」詩に「竹を囲みて埤を

成す」と。これが〈竹埤〉の基づくところである。八尺を〈尋〉という。公の「賈閣老を送る」詩に「西掖の梧桐樹、空しく留む一院の陰」とあることからすれば、中書・門下両省ともに梧桐を植えていたのである。〈洞〉は、深である。〈洞門〉は、門が奥深く洞のようであること。一説に重門をいう。〈霽〉、一に〈雪〉に作るの誤りだ。下文に〈落花遊糸〉(乳燕春深)と云うのに、どうして雪などあろうか。「呉都の賦」に「玉堂霽に対す」とあり、『說文』に「霽は、屋の水流なり」という。けだし牆陰・洞門は奥深く梧桐の大樹がその傍らに鬱蒼と茂っており、それゆえ院中は「常に陰陰」として、ほとんど昼でも暗いのであろう。そのなかに我が意を得ぬ人がぼつねんと坐しているのが言外に分かるうというものだ。

落花遊絲白日靜ナリ 鳴鳩乳燕青春深シ

鳥生^レ子^ヲ曰^ク乳^ヲ。燕乳^ス子^ヲ、正^ニ暮春之事^{ナリ}。公在^テ院中^ニ、無^レ所^レ事^ス。事^ヲ、只對^{シテ}庭院ノ閑景^ニ、見^ニ晝永^{ナル}青春深^シ、優遊^{シテ}銷^{スル}日^ヲ而已^{ナリ}。公以^ニ有^ル爲^{コト}之志^ヲ、居^ニ可^レ爲^ル之地^ニ、而徒然閑散、悠悠涉^レ日^ヲ、不^レ勝^ニ慙懼慨歎^ニ、便喚^ニ起^リ下^リ四句^ヲ。顧註^ニ云、對^{シテ}晝靜^{ナル}之境^ニ、而憐^ニ官ノ閑^{ナル}、見^ニ春深之景^ヲ、而惜^ニ時^ヲ、遇^ニ故^ニ下緊^{ナル}接^{シテ}云^フ、通^テ籍^ヲ違^ニ寸心^ニ。后山詩話^ニ山谷云、樂天笙歌歸^ニ院落^ニ、燈火

下^ニ樓臺^ヲ、非^ニ富貴^{ナル}語^ヲ、看^ニ富貴^{ナル}者^ヲ耳。不^レ如^ニ老杜^ノ此聯^ニ也。風月堂詩話^ニ晁季一云、老杜^ノ此聯、雖^レ當^ニ隆冬^ニ、時^ニ誦^ス之^ヲ、便覺^ニ下融和之氣^ヲ生^ニ于衣裾^ニ、而韶光美景、宛然在^ニ目^ニ、動^ニ盪^ス人思^ヲ上^ニ。眞^ニ幹^ニ元造^ノ一妙語也。

(注16) 『說文解字』十二篇上に「人及び鳥の子を生むを乳と曰ふ。獸は産と曰ふ」と。

(注17) 顧宸「註解」に「鳴鳩羽を払うは仲春為り、燕來りて子を乳するは暮春為り、故に漸く深きなり」と。宇都宮遯庵の両著にも引く。

(注18) 顧宸「註解」に「公自ら嘆ずらく、為す可きの地に居り、為す可きの職有り、宜しく如何ぞ知を君に受くべき、乃ち一片の閑況を写し出す」と。

(注19) 顧宸『註解』に、(注18)に引いた箇所が続いて、「張が曰く、白日静なるは素食を慨^カくなり。青春深しは時の邁^マくを惜しむなり。故に下に緊く接して云ふ、謬^{ミョウ}って籍を通じ寸心に違ふ」と。宇都宮遯庵の両著にも引く。張は張紱、字は世文(一四八七―一五四三)のこと。明・正徳八年(一五一三)の舉人。『杜工部詩通』十六卷、『杜詩本義』四卷がある(大通書局刊『杜詩叢刊』に影印を収む)。食は飧(餐)の缺誤。

(注20) 北宋・陳師道(字は無已、号は後山居士。一〇五三―一一〇一)撰。

白楽天云ふ「笙歌院落に帰し、燈火楼台を下る」、又た云ふ「帰り来れば未だ笙歌を散ぜ放めず、画戟門前蠟燭紅なり」と。富貴の語に非ず、人の富貴を看る者なり。黄魯直謂ふならく白楽天の「笙歌院落に帰し、燈火楼台を下る」と云ふは、杜子美の「落花遊糸白日靜かなり、鳴鳩乳燕青春深し」と云ふに如かざるなり。

山谷は、北宋・黄庭堅(字は魯直。一〇四五―一一〇五)の号。白楽天の詩は「宴散す」(『白氏文集』卷五十五)及び「夜歸」(同上卷二十)。なお、『文集』では門前を門開に作る。

(注21) 宋・朱弁(字は少章。一〇八五―一一四四)撰。全三卷。その卷下に、次のようにある。

季一曰く、韓退之云ふ、語妙元造を幹すと。老杜の落絮游糸白日静かに、鳴鳩乳燕青春深しの如きは、隆冬、沍寒の時に当たると雖も之を誦せば、便ち融恰の氣長裾に生じ、而して韶光美景、宛然目に在り、人思を動盪せしむるを覺ゆ。豈に是れ元造を幹し造化を奪はざらんやと。

季一は晁貫之(字は季一)のこと。韓愈(字は退之、七六八―八二四)の語というのは、孟郊(字は東野、七五―一八一四)との「城南聯句」に見える孟郊の句「大句玄造を幹す」のことであろう。

鳥が子を生むのを〈乳〉という。〈燕〉が子を〈乳〉するのは、暮春のことである。公は諫院の中にいても、職務に精励しようがなく、ただ庭の閑かな景色に向き合い、昼永く春深けるのを見て、ぶらぶらと日を過ごしているのだ。公は実現したい志をもち、それが実現可能な地位に居りながら、いたづらに暇を持てあまし、鬱々と日を過ごしており、慚懼慨嘆にたえず、ただちに以下の四句を呼び起している。顧註に云う、「昼の静まりかえったありさまを前にして職

務が暇なのを悲しみ、春深き景色を見て時の過ぎ行くのを惜しんでいる。それゆえ以下びたつと続けて〈謬^{ミョウ}って籍を通ず(寸心に違ふ)〉というのだ。『后山詩話』に「山谷云う、白楽天の『笙歌院落に帰る、燈火楼台を下る』は、富貴の語ではなく、富貴をみているにすぎないのだ。老杜のこの聯には及ばない」、『風月堂詩話』に「晁季一云う、老杜のこの聯は、冬の寒い時にくちずさんでいると、とたんに融和の氣が衣裾に生じ、のどかな春の美しい景色がありありと目に浮かんで、心を動かすのを覚える。まことに造化を廻らせる妙語である」。

腐儒衰晚謬^{ミョウ}通籍^ス 退食遲回違^レ寸心^ニ

※衰晚：オヒボレテ 謬通籍：マチガフテメシイダサレ 遲回：タチ

モトホル

腐儒出^ニ漢書^ニ黥布傳^ニ。愚昧ノ陋儒、喻^ニ壞敗無用之物^ニ。公自謂也。

謬^{ミョウ}ハ謙辭也。如^レ蒙^カ人ノ取録^一、謙^シ言^ニ謬^テ取謬^ニ。公自謂也。

謂^フ登^ラ仕籍^ニ。孟康^注漢書^ノ註^ニ通籍^ヲ謂^フ禁門之中皆有^テ名籍^一不^レ禁^ニ出入^一也。公年四十六、始^テ拜^ス拾遺^ニ、故^ニ曰^ク衰晚^一。通籍。遲

回猶^ニ躊躇^一。蓋^シ心^ニ有^テ所^レ思而足不^レ進^マ也。寸心猶^レ云^カ微志^一也。

違^ハ者事與^レ志違、不^レ能^レ成^レ功^一也。一聯責^シ身^ヲ自謙^シ而慷慨溢^ル乎言外。公爲^ニ諫臣^一必欲^レ致^シ君^ヲ而碌碌充^ル貢^ニ而已。所以不^レ勝^ニ慷慨^一也。顧註^云、公或有^レ所^レ欲奏^ニ於上^ニ、故^ニ遲回^一不^レ忍^ニ退^一。然^ニ正^ニ恐^ニ奏亦無^レ益耳^一。故^ニ下接^一云無^ニ一字^一補^一。此亦或^ハ然^{ラン}也。

(注22) 『漢書』卷三十四、英布伝。『史記』は黥布に作る。邵傳『集注』、薛益

『分類』なども『漢書』黥布伝とする。

(注23) 薛益『分類』に「腐とは壞敗して用無きなり」、宇都宮遯庵の詳説に「腐儒ハ公自言。壞敗^{シテ}無^テ用^一曰^ク腐儒^一。漢書黥布伝ニアル字ナリ」と。

(注24) 022「至日興を遣る。北省の旧閣老・両院の故人に奉寄す」詩二首其一の邵傳『集解』に「人の取録を蒙るが如きを謙して謬取謬録と言ふなり」と。

(注25) 顧宸『註解』にこれを挙げる。但し、『漢書』卷七十四、魏相伝に顔師

古は「通籍は禁門の中に名籍有り、出入を恣にするを謂ふ」と注するが、同書卷七十、陳湯伝の孟康注には「通籍は、禁止せず、出入するを得さしむるなり」というのみで、顧震の引くような形では見あたらない。なお、『註解』は宇都宮遯庵の両著に挙げる。(注26)、(注27)も同様。

(注26) 顧震『註解』に「公年四十六、始めて拾遺に拜す。故に衰晩と云ふ」と。(注27) 顧震『註解』に「公遅回して退くに忍びず。必ず上に奏せんと欲する所有り。正に奏も亦た益無からんことを恐る。徒に寸心と相違するのみ」と。

《腐儒》は、『漢書』黥布伝に出てくる。愚昧の陋儒。くずで役に立たないものに喩える。公自らの謂。《謬》は、謙遜の辞。人から取り立てられた場合に「謬つて取らる」、「謬つて録せらる」と言うのである。《籍を通ず》は、官僚名簿に登録されること。孟康の『漢書』注に「籍を通ずとは、禁門の中に名簿があつて、出入りを禁じられていないことである」と。公は年四十六にして、やつと拾遺を拜命した。それで《衰晩籍を通ず》という。《遅回》は、躊躇とほぼ同じ。けだし心に思うことがあつて足が進まないのである。《寸心》は、微志とほぼ同じ。《違ふ》とは、事、志と違い、功を成すことができないのである。この一聯は我が身を責め謙遜し、慷慨が言外に溢れている。公は諫臣となりきつと君をすすめまいらせようとしたものの、碌々と員数に充てられてゐるに過ぎないのだ。慷慨にたえないわけである。顧註に云う、「公には御上に奏請しようと思うことがあつて、それで《遅回》して退出するに忍びない。さりながら恐らくは奏上してもやはり無益だろうと心配するのだ。それで以下続けて《一字の補無し》という」と。この場合もやはりそうかも知れない。

衰職會無一字ノ補 許身愧ハ比雙南金

※曾：ネカラ

衰職ハ謂ニ帝業ヲ。詩ノ大雅ニ衰職有レハ闕ルコト、維仲山甫補之ヲ。天子御衣龍衮、故曰衰職。補ハ補其闕也。古詩美人贈我綠綺琴、何以報之ニ雙南金。荆陽之金尤所重也。公平生自許甚重、竊懷稷契之志。今雖備拾遺之責、不能上諫

書論「政事ヲ以輔中、吾君之徳ヲ。宿志蹉跎、無由報効。當初感恩許身、欲以効國家之用。故自重。比雙南金。以今思之、則吾過矣。即謫先朝露、亦何足惜耶。追悔不其量而竊自慙愧也。公嘗有詩云致君堯舜上、再使風俗淳。又云許身一何愚、竊比稷與契。其比雙南金者ハ、亦唯爲國家自重也。」

(注28) 『詩経』大雅・蒸民に「衰職闕くること有れば、維れ仲山甫之を補ふ」と。朱子の集伝に「衰職は、王職なり。天子龍衮、敢へて王闕を斥言せず、故に衰職闕有ればと曰ふ」。

(注29) 薛益『分類』に見える。宇都宮遯庵の増広本にも引く。「古詩」は、西晋・張載の「擬四愁詩」(『文選』卷三十)のこと。「文選」では、美人を佳人に作る。

(注30) 『詩経』魯頌・泂水に「憬たる彼の淮夷、來たりて其の琛を献ず。元龜象齒、大に南金を賂る」とあり、毛伝に「南は荆揚を謂ふなり」と。揚州及び荆州で金を産したこと、『尚書』禹貢に見える。本文で《荆陽》とするのは誤り。東陽は、宇都宮遯庵の増広本に「分類」を挙げて荆陽に作るのを襲ったのであろう。

(注31) 稷契は、堯舜に仕えた二人の名臣。「京白り奉先臬に赴く詠懷五百字」(詳註卷四)に「身を許して一に何ぞ愚なる、窃に稷と契とに比す」と。梁・江淹「恨みの賦」(『文選』卷十六)に「朝露濫ち至り、手を握りて何をか言はん」と。李善注は『漢書』蘇武伝に「李陵、蘇武に謂ひて曰く、人生は朝露の如し。何ぞ久しく自ら苦しむること此の如くなるや」とあるのを挙げる。

(注33) 「韋左丞文に贈り奉る二十二韻」(詳註卷二)。

(注34) 注(31)参照。

《衰職》は、帝業のこと。『詩経』大雅に「衰職闕くること有れば、維れ仲山甫之を補ふ」と。天子の御衣は龍衮であるから、《衰職》という。《補》は、その闕を補うこと。古詩に「美人我に緑綺琴を贈る、何を以て之に報いん双南金」と。荆陽「揚」産の金がとりわけ重んじられたのである。公は平生から自ら任ずることはなはだ重く、唐

虞の名臣たる稷や契のごとくありたいとの志望を抱いていた。今、拾遺の員数には入っているものの、諫書を奉り政事を論じて吾が君の徳を輔佐することができず、かねて抱いていた志は実現できないまま虚しく時を過ごし、恩に報い功を効す手立てがない。当初は君恩に感じて「身を許し」、国家の役に立ちたいと念じており、それゆえ自らを「双南金」に比するほどに重んじていた。今にして思えば、自分は間違っていたことになる。たちまち朝露に先んじて消え失せても、どうして惜しむに足ろうか。後から自らの力量を知らずにいたのを悔やみ、ひそかに慚愧するのである。公はかつて詩を作って「君を堯舜の上に致して、再び風俗をして淳からしめん」といい、また「身を許して一に何ぞ愚なる、窃に稷と契とに比す」ともいう。「双南金」に比したのは、やはり国家のために自らを重んじたのである。

012 曲江二首（其一）

曲江在「長安」東南隅、杜陵西北五里^二。漢武帝所造^レ。其水曲折、有^レ似^二蜀中嘉陵江^一、故名^二曲江^一。開元中疏鑿^{シテ}益^ニ爲^ル勝境^一。南有^二紫雲樓芙蓉苑^一。西有^二杏園慈恩寺^一。花卉環周、煙水明媚、都人遊春、繁華^ニ撲^レ地。故^ニ公亦數^ニ遊^フ焉。此詩以^二「仕不^レ得志^一、有感^ニ於暮春^一而作。蓋強^ニ自排悶^一、放浪^ニ拚醉^一消^ス其壘塊^一」楊升菴^{（注3）}所謂耗^{シテ}壯心^一而遣^ニ餘年^一者。讀者以^レ意逆^レ志^一可也。

（注1） 晩唐・康駢『劇談録』に「開元中疏鑿して、遂に勝境と爲る。其の東南に紫雲樓・芙蓉苑有り、其の西に杏園・慈恩寺有り。花卉環周、煙水明媚。都人の遊賞、上巳・中和の二節に盛んなり」とあるのに基づく。なお、『劇談録』の記事は、朱鶴齡の輯注や顧宸『註解』に引く。宇都宮遯庵の増広本にも、これらを挙げる。

（注2） 東陽の『薈瓊録』に「王勃滕王閣序二閭闔撲^レ地ト云ヘルハ、ヒシト建

ツマリタル勢ヲ謂ヘリ。鮑照蕪城賦「塵闔撲^レ地、歌吹沸^レ天」トアリ、是其本ヅク所ナリ。撲ハ挨也撃也ノ訓アリ、オシツケテ来ル意アリ。岑參詩「花撲^二玉缸^一春酒香、バツバト^ニ翻来^リテ酒氣ヲ^ニ庄倒^スル意アリ。張説ノ渭橋南渡花如^レ撲モ^ニ押合^テ簇ガ^ルヲ^ニ謂ナリ。然レバ閭闔撲^レ地モ^ニ地ヲ^ニ打押ヘル意ヨリシテ地面ヲ^ニ尽セル義トナル。市廛繁華ノ盛ナル押合テ透間ナキ様ナリ。沈佺期詩、行樂掃恒晚、香塵撲^レ地遙、杜牧詩、謳歌人撲^レ地、鷄犬樹連^ニ天、白樂天詩、青苔撲^レ地連^ニ春雨^一、白浪掀^レ天尽^ニ日風^一、元稹詩、人烟撲^レ地桑柘稠ナド、スベテ地ヲ^ニ尽シテ押合ヘルナリ。満地ト云フヨリハ義重シ、庄地ト云フニ近シ。頗ル勢ヲ^ニ持チタル字面ナリ。李善文選註ニハ、楊子方言、撲、尽也。郭璞曰、今江東種^レ物皆生云^二撲地生^一トアリ、未ダ義ヲ^ニ尽サヌ解ナリ」と指摘。

なお、鮑照「蕪城賦」は『文選』卷十一。岑參の詩は「韋員外家花樹の歌」。張説は「聖製初めて秦川の路に入るに和し奉る寒食応制」詩。沈佺期は「洛陽道」詩。杜牧は「往年故府呉興公に随ひ夜、蕪湖口に泊す。今、官に赴き西去し、再び蕪湖に宿す。感旧傷懷して因つて十六韻を成す」詩。
*但し各本、歌を謡に作る。白樂天は「風雨晚泊」詩。元稹は「西涼伎」。
（注3） 〈拚〉は〈拌〉に同じ。唐代の俗語で、万事を放擲してそのことをなす意。拚醉は、ひたすら酔つ払う。014「曲江酒に對す」詩の詳解に「拌、俗に拚に作る。自ら放棄するなり」と。

（注4） 『世説新語』任誕篇に「王大（王忱）曰く、阮籍は胸中に壘塊あり、故に酒を須ひて之を澆ぐ」と。

（注5） 楊升庵は、明・楊慎（字は用修、升庵は号。一四八八―一五五九）のこゝと。「壯心を耗して餘年を遣る」は、「重慶の大守劉嵩陽に答ふる書」（『升庵全集』卷六）に見える語。

（注6） 『孟子』万章上に「詩を説く者、文を以て意を害せず、辞を以て志を害せず、意を以て志を逆ふ、是れ之を得たりと爲す」（およそ詩を説くには、一つ一つの文字にとらわれて一句の意味をとり損ねてはいけなし、また一句の意味にとらわれて作者の真意をとり損ねてはいけなし。自分の心で作者の真意をよく汲み取って説いてこそ、詩がわかるというものだ）とある。ここである（詩）とは、『詩経』の作品を指す。

〈曲江〉は、長安の東南隅にあつて、杜陵の西北五里のところにある。漢の武帝が造つたものである。その流れは曲折しており、蜀の嘉陵

江に似ているところから、〈曲江〉と名づけられた。玄宗の開元年間、開鑿されてますます景勝の地となった。南には紫雲樓や芙蓉苑があり、西には杏園や慈恩寺がある。花や木々がぐるりと周囲に植えられ、かすみ煙る水面は明媚で、春ともなれば都の人々が遊樂し、あたり一面押し合い圧し合い群がって賑わい榮える。されば、公もしばしば彼の地に遊んだのである。この詩は、仕官したものの我が意を得ず、暮春に感ずることがあつて作られた。けだし、強いて憂晴らしをしようと、あちこちをぶらぶらと歩き回り、酔っ払つて胸中のわだかまりを消そうとしたのであろう。楊升庵のいわゆる「壮心を耗して餘年を遣る」というものだ。読者は自分なりに作者の真意を斟酌してかまわない。

一片花飛減卻春^一 風飄^{シテ}萬點^ヲ正愁^{シム}人^ヲ

※飄：フキトバス 愁：ナゲカセル

起句^ハ爲^レ客、次句^ハ是主。一片花飛且不可、而^ル況^ヤ於^ニ萬點^ニ乎。通篇勸酒之辭。以^ニ惜^レ花^ヲ傷^ム春^ヲ起^ス之^ヲ、與^ニ岑參^ノ韋員外家^ノ花樹歌^ニ同一趣向。起得^{シテ}突兀^ニ、句法奇橫、大家氣象、妙不可及。正一作更^ニ、似是而非。蓋此日之遊、適^ニ值^ニ落花欲盡^ノ之候^ニ。狂風吹散、紛然大亂。安^ソ得^シ不^{コト}愁^{シメ}人^ヲ。正字、當^ニ如是^ヲ觀^ル、便見^ル旨深^ニ。愁字領^ス全首^ヲ詩神^ニ。句句皆從此生^ス。註家或^ハ引^ニ北^ノ語^ヲ、僞蘓^ノ杜撰也。

(注7) 宋末元初の方回(号は虚谷。一二二七〜一三〇七)『瀛奎律髓』巻十、春日類に、この詩を載せ、その評に「第一句、第二句絶妙。一片花飛ぶ且つ不可なるに、況んや万点なるをや」という。ちなみに、『瀛奎律髓』には寛文十一年(一六七二)刊の和刻本がある。

(注8) 岑参の「韋員外家の花樹の歌」(『唐詩選』巻二所収)は、次の如くである。

今年花似去年好	今年の花は去年に似て好し
去年人到今年老	去年の人は今年に到りて老ゆ
始知人老不如花	始めて知る 人老いて花に如かざるを

可惜落花君莫掃^一 惜しむ可し 落花 君掃ふこと莫かれ
君家兄弟不可當^一 君が家の兄弟 当たる可からず
列卿御史尚書郎^一 列卿 御史 尚書郎
朝回花底恒會客^一 朝より回りにて花底 恒に客に会す
花撲玉缸春酒香^一 花は玉缸を撲ちて春酒香し

(注9) 『唐詩實珠』(巻四十九、春の部)に「起こし得て突兀、旨深く句法縱横。大家の氣象、妙言ふ可からず」と。

なお、文学批評用語としての「氣象」については、南宋・嚴羽『滄浪詩話』に見え、『中国文明選 文学論集』(朝日新聞社刊、一九七二年)に、荒井健氏による解説がある。

(注10) 例えば、先に挙げた『瀛奎律髓』では、〈風〉字を〈花〉に作り、〈正〉字を〈更〉に作る。

(注11) 『夜航詩話』巻一に、「七律の首句は宜しく突然として起こり、勢い遏む可からざるべし。工なり難き所以なり。然れども此れ猶ほ能くす可し。第二句の好は尤も得難し。蓋し是の句全首の詩神を領し、句句皆此れ従り生ず。一篇勝を争ふ、此に在り。画竜点睛の要処にして、其の力を用ふる所人をして覺らざらしむるに在り。尤も難き所以なり」と。

(注12) 例えば、宋・徐居仁編、黄鶴補註『集千家註分類杜工部詩』巻十一に「蘇曰く、丘豫、庭中の落花を見て友人に謂ひて曰く、此の一片を飛ばすさへ青春の色を減却す。行楽を趁はずんば、復た何れの時を待たんや、と。なお、『集千家註分類杜工部詩』には、五山版(永和二年「一三六七」)覆刻」がある。

(注13) 033 「裴迪蜀州の東亭に登つて客を送り早梅に逢つて相憶ふて寄せらるを和す」詩の詳解に次のように云う。

偽蘇とは、南宋の時、閩越の鄭昂といふ者、東坡(蘇軾のこと)の名を仮りて老杜事実一編を作る。其の引く所の事皆根拠無し。反つて杜甫の見句を用ひて増減して文を爲つて託して古人の語と爲す。之を偽蘇註と謂ふ。今、千家註に蘇曰くといふ者は是れなり。朱子文集・洪容斎隨筆に詳らかに其の妄を辨ず。

『夜航詩話』巻四にも偽蘇注に言及する箇所がある。なお、偽蘇注について考究した論文に、程千帆「杜詩偽書考」(『古詩考索』所収、上海古籍出版社、一九八四年)、莫砺鋒「杜詩『偽蘇注』研究」(『文学遺産』一九九

九年第一期)がある。

起句は客で、次の句が主である。〈一片花飛び〉てさえよくないのに、ましてや〈万点〉であればなおさらのことだ。一篇全体が酒を勧める詞であるが、花を惜しみ春を傷むことから説き起こしているのは、岑参の「韋員外家の花樹の歌」と同じ趣向である。始まり方は唐突で、句法が奇抜であり、大家の気象は、その妙なること及びもつかない。〈正〉字を一に〈更〉に作るのは、よさそうに見えるが誤りだ。けだし、この日、曲江に遊んで、おりしも落花が〈尽きんと欲する〉のに出逢った。狂風が花びらを吹き散らし、はらはらと大いに舞い散っている。どうして〈人を愁〉えさせずにおられようか。〈正〉字は、当然このように見なければならず、それでこそただちに深い味わいが分かる。〈愁〉の字は、一首全体の精神や気分を支配しており、一句一句皆これから生じている。注釈家のなかには丘豫の言とやらを引く者があるが、これは偽蘇註の杜撰なものである。

且看欲盡花經眼 莫厭傷多酒入唇

※経眼：ミスキ 傷：アタル 入唇：ツギコム

上二下五の句法。始言一片、次言萬點、終言欲盡。三句相承由淺而入深也。経眼言空中之花瞥然過去。此緊承上。即風所飄者、非言在樹殘花也。聊嘗曰沾唇、則入唇言灌也。蓋一片花飛、雖未必足深惜、而傷春之情、已覺減風光矣。何況今日多風、萬點爭飄、正爾愁人、感可勝耶。須看欲盡之花、過眼便空。當此無聊、第宜痛飲。豈可以酒之傷多、厭而不入唇哉。公志不行、拚醉遣愁。非復比雙南金之身也。二句看他用虛字之妙。語勢圓轉、如珠走盤。然學者好放此、則鄰女效顰矣。

(注14) 011「省中の院壁に題す」詩に「衰職曾て一字の補ふ無く、身を許して愧づらくは双南金に比せし」と言うのに基づく。

(注15) 本来、「他」は軽く添えただけで意味はない。唐代の口語的表現。

但し江戸時代には、他のくを看ると訓じる。例えば、『三体詩』巻一や『唐詩選』巻七に載せる王維「盧員外象と崔廋士興宗の林亭を過る」詩の「白眼看他世上人」などが、それ。

(注16) 自分の醜さを顧みず、人の真似をすること。学ぶことのよくない喩え。

古の美女、西施が胸を病んで眉を��めた姿を美しいと思った隣里の醜女がまねた故事(「莊子」天運篇)による。胡仝「碧溪漁隱叢話」前集卷九、杜少陵四に引く北宋・范温の「詩眼」(潜溪詩眼)に「今人の詩を学ぶ、多く杜甫の平復処を得。乃ち隣女の效顰する者なり」とある。

なお、『夜航詩話』巻六には「杜詩に且つ看よ尽きんと欲するの花眼を経るを、厭ふ莫かれ傷ること多き酒唇に入るを、と。虚字斡旋の妙、円転として珠の盤に走るが如し。然れども学者好んで此に倣へば、則ち破碎に勝へず。蓋し詩の虚字を用ふるは、猶ほ舍を構へて欄子を用ふるがごときなり。若し善く用ひざれば、動揺して頽れんと欲す。豈に浪りに用ふ可けんや」という。

(七言の句は、ふつう上四字、下三字で切れるが、ここは)上二字下五字の句法。始めに〈一片〉と言ひ、次に〈万点〉と言ひ、終りに〈尽きんと欲す〉と言ふ。三句は相承け、だんだん深まってゆくのである。〈眼を経る〉は、空中に舞う〈花〉がちらちらと目の前を過ぎ去ることを言う。これはびたつと上を承けている。〈風〉の〈飄〉すものにほかならず、樹に残っている花を言うのではない。ちよつと嘗めるのは、唇を沾すという。されば〈唇に入る〉とは、そそぎ込むことを言うのである。けだし、〈一片花飛ぶ〉のはさほど深く惜しむに足りないとはいへ、春を傷む心情からすれば風光を減ずることのように感じられるのである。ましてや今日は風つよく、〈万点〉争つて〈飄〉り、まさにこのように〈人を愁〉えさせる、まったく感に堪えない。よくよく見ておかねばならぬのは、〈尽きんと欲する花〉は、眼前を過ぎればたちまちなくなってしまうことだ。このどうにもやるせない時には、ただ思い切り飲むのがよい。どうして〈酒〉が〈傷ること多〉く体によくないからといって、〈厭〉いて〈唇に入〉

れずにおれようか。公は志が実行されず、ひたすら酔っ払って愁を忘れようとしたのである。もはやかつての〈双南金〉に喩えた身の上ではない。この二句は、虚字の使い方の妙を看よ。語勢は円滑で、盤の上を真珠が転がるようだ。されど初学の者が好んでこれを真似すれば、隣家の醜女が西施の鬢みに倣うようなみつももないものになつてしまう。

江上ノ小堂集ニ翡翠一 苑邊ノ高塚臥ス麒麟一

※巢…スミカトナル 臥…タラレテアリ

江上ノ小堂ハ、蓋貴遊所ノ設亭館。處處傍岸ニ有之也。巢翡翠一、以其荒涼無レ人、竟ニ視テ爲ニ棲息之所ト也。苑ハ即芙蓉苑。塚知隴反。高塚ハ尊貴ノ所葬。臥ハ傾倒也。秦漢ノ間、公卿ノ墓以石麒麟ヲ鎮ス之ヲ。蓋唐時亦或ハ設レ此也。上半首已ニ暢ニ寫傷春ノ情。於是更ニ感ニ人世無レ常。曲江之境、風景佳麗、遊宴繁華、祿山カ亂後、頽敗未レ修、無ニ復向時之勝。空堂無レ人而水鳥來巢、荒塚無レ主而石獸毀臥。皆昔日滿眼ノ繁盛、今乃淒涼如此。其傷目ノ愴情、不ニ啻ニ落花欲レ盡也。翡翠麒麟、眞假取レ對。

(注17) 錢注(卷十)は、〈苑〉字を〈花〉に作り、「一に苑に作る」と。

(注18) 反切による字音表示。例えば、『字彙』に「知隴の切。音腫。平らなるを墓と曰ひ、封ずるを塚と曰ひ、高きを墳と曰ふ」と。

(注19) 『唐詩實珠』に見える言い方。(注25)参照。

(注20) 翡翠は本物「眞」であるのに対し、麒麟は石像で本物ではないから仮である。(注27)参照。

〈江上の小堂〉は、けだし高官や貴族が設けた亭館であろう。ここかしこと岸にそつて至る所にある。〈翡翠巢くふ〉は、それが荒れはて寂れ人氣がないので、とうとう住みかとみなしたのである。〈苑〉は、芙蓉苑のこと。〈塚〉は、知隴の反。〈高塚〉は、尊貴なお方が葬られている場所。〈臥〉は、傾き倒れることである。秦漢の頃、公卿の墓には麒麟の石像を置いて鎮めとした。けだし唐の時代もやはりこれ

を設けることがあつたのだろう。前半四句では行く春を傷む心情をあますところなく述べ、ここではさらに人世の常無きことを感じてゐる。曲江のあたりは、風景が美しく、遊宴がくりひろげられる繁華な場所であつたが、安祿山の乱以後は、すっかり荒れ廃れて修復もされず、もはや以前のすばらしきはない。空堂には人がおらず水鳥が巢を作り、荒塚には主なく石獸が毀たれ倒れたままで、どこもついでこの間までは、見渡すかぎり繁榮を極めていたのに、今ではかくも淒涼としている。目を傷め心を悲しませるのは、ただ落花が〈尽きんと欲する〉ためだけではないのだ。〈翡翠〉と〈麒麟〉は、眞假対となつてゐる。

細ニ推ハ物理ヲ須ニ行樂一 何ソ用ニ浮名絆ニ 此身一

※細推…ツラく、カンガフ 行樂…ユサン 絆…ツナガルハ

推ハ者以此ヲ料彼レ之謂。行樂ハ遊觀爲樂也。漢書楊惲傳ニ、人生行樂、耳。須ニ富貴何ノ時。浮名ハ虚譽也。謂非其才ニ而謬忝ヲ祿也。絆ハ馬繫也。此緊シク承上二句ヲ、恍然大悟シ、信ニ浮名之眞無用一ナルコトヲ、而悲ニ人生區區、困ニ於塵俗中一。夫眼前見ル空堂之棲ニ野鳥、荒塚之倒ニ石獸、人世榮枯代謝、其不レ常ナラ皆然。富貴權力、豈足レ恃耶。故ニ詳ニ推ニ此理一、則惟須ニ及時ニ行樂、酣飲シテ忘ニ憂而已。何ソ可下爲ニ虚名ノ所レ牽而以ニ官爵ニ羈ニ絆ニ 此身一爲ニ上乎。蓋亦玩世之辭、出ニ於無聊之餘ニ、不レ得レ已耳。房相公琯陳濤斜之敗、賀蘭進明譏ニ於肅宗。公惜ニ其賢一上疏救之。肅宗大ニ怒、殆殆ニ於危ニ。公自是悠悠不レ得レ意ヲ。此蓋其時ノ作也。

(注21) 基づくところあるのか、不明。

(注22) 『漢書』卷六十六、楊惲伝附。なお、「孫会宗に報ずる書」として『文選』卷四十一にも収録。

(注23) 例えば、『字彙』に「絆、博漫の切。音は半。馬繫也」と。

(注24) 顧宸『註解』に「公、細かに推す中従り、恍然として大悟す。浮名の眞

に無用なることを信じ、亦た惟だ酒を飲みて行樂するのみ」と。宇都宮遷庵の増広本にも引く。

(注25) 『唐詩實珠』に「上半首已に春を傷むことを暢写す。榮枯代謝に感悟する所以。華堂の野鳥を巢くはせ高塚の石麟を倒臥するを見れば、人世の廃興皆然り」と。

(注26) この一節、「何ぞ虚名の為に牽かれて官爵を以て此の身を羈絆することを為さんや」と訓するが、文末の「為乎」は、反問を強調する語氣を示す助字。例えば、「漁父の辞」の「何故深思高举、自令放為」の「為」も同じ。清・王引之（二七六—一八三四）『経伝釈詞』に指摘。

(注27) 玩世は、一切の世事を軽視すること。『漢書』東方朔伝賛に「隠に依つて世を玩ぶ」と。

(注28) 房琯の陳濤斜での敗戦は、肅宗の至徳元載（七五七）十月のこと。賀蘭進明が房琯を讒言したことについては、『旧唐書』卷一一一、房琯伝に「会たま北海太守賀蘭進明、河南自り至り、詔して南海太守を授け、御史大夫を撰せしめ、嶺南節度使に充つ。中謝す。肅宗之に謂ひて曰く、朕処分して房琯をして卿に正大夫を与へしむるに、何為れぞ撰なるや」と。進明対へて曰く、琯、臣と隙有り、と。上以て然りと為す。進明因つて奏して曰く、（中略）上、是れ由り琯を惡む」と。また宋・計有功『唐詩紀事』卷十七にも、「肅宗の時、進明、北海太守と為り、行在に詣る。上、房琯に命じて進明を以て南海太守兼御史大夫・嶺南節度使と為さしむ。琯、以て撰御史大夫と為す。進明、入りて謝す。遂に之を譖す。上、是れ由り琯を疏んず」とある。ちなみに、〈中謝〉は任官の命を受けた時、宮中に入つてその御礼を言上すること。〈撰〉は代行。〈処分〉は適宜処置すること。（注29）杜甫が房琯を弁護して、肅宗の怒りに触れ、三司に推問されたことをいう。訳注稿（一）、「詩聖杜文貞公伝」参照。

〈推〉は、こちらでもつてあちらをはかる意味。〈行樂〉は、遊観して楽しむこと。『漢書』楊惲伝に「人生行樂せんのみ。富貴を須たんは何れの時ぞ」とある。〈浮名〉は、実体が伴わない虚誉である。その任にあたる才がないのに俸禄をもらっていることである。〈絆〉は、馬の足をつなぐつな。ここは上二句をびたつと承け、忽然大悟し、〈浮名〉がまことに無用のものであると信じるようになり、人と生

まれてこそせと塵俗のなかで困しむのを悲しんでいる。そもそも、人氣のない堂には野鳥が棲みつき、荒れはてた塚では石獸が倒れているのを眼前に見れば、人の世の榮枯移り変りは、その常ならざること、すべてがそうである。富貴や権力は、いったい恃むに足りようか。されば、つぶさにこの道理を推せば、ただ今のうちに〈行樂〉し存分に酒を飲み憂を忘れねばならぬ。どうして虚名に引つ張られ官爵でこの身ががんじがらめに縛るようなまねができようか。けだし、これもやはり世事を軽んじた詞だが、無聊のあまり吐かれたもので、やむにやまれずどうしようもないのだ。宰相の房琯が陳濤斜で敗れ、賀蘭進明が肅宗に讒言した。公はその賢明なるを惜しみ意見書を上申して救おうとしたが、肅宗は激怒して、あやうく危難に瀕しかけた。公はこれ以後、鬱々として心樂しまず官界で意を得なくなつた。これは、けだしその時の作であろう。

013 其二

朝 回 日日典 春衣 每日江頭盡 醉 歸

※典：シチニオク 尽醉：ノミキル

以レ物ヲ質ス金ニ謂ニ之 典一 時已ニ春暖、故ニ得レ典コトヲ衣ヲ也。見ニ貧寒甚ク亦嗜コト酒ヲ甚一 公家ニ少陵ニ、與ニ曲江ニ近シ。故ニ退朝之暇、以ニ典衣之錢ヲ、毎日江頭ニ玩春ヲ、酩酊遣興ヲ而歸ル。蓋春已ニ欲暮シト、玩花暫時之事、急ニ宜ニ相賞。興不ニ自禁一、所ニ以典衣ヲ往遊一。此直ニ承前首ノ須ニ行樂一來リ、醉遊一以慰ニ無聊一。出ニ於不レ得レ已コトヲ耳。

(注1) 『而庵説唐詩』（卷十八）に見える。

(注2) 『唐詩實珠』に「言ふところは風光水の如く流転し、暫時の事、相違ふ可からず。急に宜しく相賞すべきなり」と。

(注3) 『唐詩實珠』に「前首の須らく行樂すべしより承け下す」と。品物を質入して金銭を借りることを〈典〉という。季節はもうすつ

かり春となり暖かくなっているの、衣服を質入できるのである。その窮乏ぶりが甚だしいのと同時に酒を好むことが甚だしいのを表わしている。公は少陵に居住しており、〈曲江〉とは近い。だから朝廷から退出して暇になると、衣服を質入した錢で、毎日、〈江頭〉で春景色を愛で、酩酊し憂晴らしをしてから帰るのだ。けれど、春はすでに過ぎんとし、〈花〉を愛でるのは後わずかのことなれば、急ぎ賞玩せねばならず、内に起こる感情を押さえきれずに、衣服を質入して遊びに行くわけだ。これは前首の「須らく行楽すべし」を直接受け、酔遊して無聊を慰めているのであって、やむにやまれぬどうしようもない気持ちから出たことなのだ。

酒債尋常行^ク處^ニ有^ニ 人生七十古來稀

※行^ル處^ニ：ユクサキ^ク 古來^ニ：イマハカリカハ

債音酒、除^テ物^ヲ未^レ償^ビ曰^ク償^ビ。呉志^ニ孫權^ノ叔濟嗜^シ酒不^レ治^シ生産^ヲ。

常^ニ欠^ニ人^ノ酒^ヲ。人皆笑^フ之^ヲ。濟怡然^{トシテ}自若^ク。謂^テ人曰^ク、尋常^ハ行坐^ノ處^ニ、欠^ニ人^ノ酒^ヲ。欲^ク貨^ニ此^ニ縵袍^ヲ償^シ上^レ之^ヲ。尋常^ハ謂^フ平生^ノ也。

本見^ニ賈誼^ノ長沙^ノ賦^ニ。八尺^ヲ曰^ク尋^ノ、倍^ニ尋^ノ曰^ク常^ノ。見^ニ非^ル奇特^ノ。因^ニ爲^ニ平生^ノ之^ノ謂^ト。本度^ニ名^ヲ。故^ニ以^テ對^ス七^ノ十^ノ。此與^ニ起^ニ二句

一^ノ氣^ヲ說^ス下^ス。不^レ唯^ニ典^ニ衣^ヲ而已^{ナラ}、平常遊行^ノ之處^ニ、酒債往^ニ往^ニ而有^シ。抑^ク不^レ亦^ニ甚^ニ乎^ノ。正^ニ以^テ人生七十古來希^ノ有^{コト}、不^レ可^レ不^レ及^ニ時^ニ行^ニ樂^ヲ。以^テ慰^ニ餘年^ノ一^ノ耳^ヲ。亦暗^ニ照^ニ應^ニ前首^ノ高塚麒麟^ノ。此則直

就^ニ身^ニ而^レ言^フ、不^レ翅^ニ咄^ニ咄^ニ逼^ニ人^ノ也。

(注4) 基づくところがあるのか、不明。なお、『漢書』卷八十、淮陽王劉欽伝の顔師古注に「責は、人に財物を仮貸して未だ償はざる者なり。責、音は側解の反」とある。責は、債の古字。

(注5) 宇都宮遼庵の詳説に引く清・張遠『杜甫會粹』(巻五)に挙げるが(但し、叔を姪に、貸を賈に作る)、『三國志』呉志には見えず、仇兆鰲は「呉志を考ふるに、初めより此の事無し」と指摘する(詳注巻六)。なお、この孫済の話は、もとは『分門集註杜工部詩』(巻三)に載せる北宋・王洙(字は原叔、九九七―一〇五七)に仮託したいわゆる偽王洙注に見え、

宋 胡理撰『蒼梧雜志』(『說郛』所收) 酒債の条にも載せられている。偽王洙注のことは、012「曲江」二首其一の(注13)に挙げた程千帆および莫砺鋒論文参照。

(注6) 『漢書』卷四十八、賈誼伝。但し、「長沙の賦」という題名ではない。『文選』卷六十にも「屈原を弔ふ文」として収録。『漢書』応劭の注に「八尺を尋と曰ひ、尋に倍するを常と曰ふ」と。

(注7) 『而庵說唐詩』に「八尺を尋と曰ひ、尋に倍するを常と曰ふ、奇特に非ざるを見はす」と。

(注8) 『唐詩貫珠』に「第四も亦た高塚麒麟の処と照応するなり」と。

(注9) 「咄咄人に逼る」は『世說新語』排調篇に見える殷仲堪の言葉。痛い所を突いてくる、の意。

〈債〉の字音は酒。品物を付けて買ってまだ代金を支払っていないのを〈債〉という。『呉志』に「孫權の叔父の孫済は酒好きで生業に励まず、いつも他人から酒代を借りていた。人に笑われても、にこにこして平気な風であった。人には、常日頃行く先々で酒代を借りているから、このどてらを売って支払いたいと思う、と言っていた」とある。〈尋常〉は平生をいう。もとは賈誼の「長沙の賦」に見え、八尺を〈尋〉といい、〈尋〉の倍を〈常〉という。格別変わったことではないのを表わし、それで平生の意味になった。本来は長さの単位であるので、〈七十〉の対偶表現となっている。これと初めの二句とは一氣に言い下している。ただ衣服を質入するばかりではなく、日頃遊びにゆく先々に、酒代の付けがこかしこにあるのだ。それにしてもまあ何ともひどいものではないか。まさしく〈人生七十〉まで達した者は昔からめったにいなかったのを理由にして、今のうちにせいぜい遊んで残りの人生、心慰めようとするのだ。こも同じく前の詩の〈高塚麒麟〉と暗に照応しているが、この場合はじかに自分自身について言っており、ただぐさつと人の痛い所を突いてくるだけではないのである。

穿^レ花^ヲ蛺蝶深深^{トシテ}見^ヘ 點^{スル}水^ニ蜻蜓款款^{トシテ}飛

※穿：クマル 深深：ミヘツガクレニ 款款：ユタ／＼ト

穿^レ花言^下翩翩穿^下花際^上而往來^上スル。深深^下ト見^下言^上「隱見^上スル。款款^上ハ緩^上飛^上貌。時時^上乍^上低^上掠^上水^上而款款^上嬉翔^上。彼^上其微物^上皆優遊得^上ニ其所^上。而大丈夫處^上世^上、宜況^上局促^上、悶悶^上涉^上日^上、獨何^上心哉^上。無^上限感慨^上在^上言表^上ニ矣。凡^上因^上物^上寓^上意^上、非^上深^上ニ於^上詩^上者^上不^上能^上識^上其趣^上耳。程伊川嘗^上舉^上此聯^上一詠^上之曰、如^上此^上閑言語^上道^上出^上シテ做^上甚^上。與^上吹皺^上一池^上春水^上干^上卿^上何事^上同一沒趣^上人、誠^上面貌^上可^上憎哉^上。石林詩話^上ニ云、杜詩緣^上情^上體^上物^上、自有^上天然^上工巧^上。深深^上字若^上無^上穿^上字^上、款款^上字若^上無^上點^上字^上、皆無^上以^上見^上其精微^上。然^上讀^上之渾然全^上似^上未^上嘗^上用^上力^上。此所^上以^上不^上礙^上其氣格^上超勝^上、使^上晚唐^上諸子^上爲^上之^上、便當^上入^上魚躍^上練波^上拋^上玉尺^上、鶯穿^上絲柳^上織^上金梭^上之體^上ニ矣。

(注10) 顧宸『註解』に見える。宇都宮遼庵の両著にも引く。
(注11) 程伊川は、北宋・程頤(一〇三三～一一〇七)のこと。伊川先生とよばれ、明道先生と称せられた兄の程顥(一〇三二～一〇八五)と、あわせて二程子という。ここに挙げる伊川の言葉は、『二程全書』巻十九や『二程先生類語』巻七に見える。ちなみに、後者には明暦三年(一六五五)の、また前者には寛文十年(一六七〇)以前に刊行された和刻本がある。
なお、『夜航詩話』巻四にも「程伊川云ふ、某、素より詩を作らず。亦た是れ禁止して作らざるに非ず。但だ此の閑言語を為すを欲せず。且つ如今詩を能くすと称するは、杜甫に如くは無し。花を穿つ蛺蝶深深として見へ、水に点する蜻蛉款款として飛ぶと云ふが如きは、此の如き閑言語、道ひ出して甚々を做すや。某、曾て詩を作らざる所以なりと。此れ吹き皺む一池の春水、卿が何事に干かると同一の没趣人、頭巾の氣極まれり」とあり、こと同様の指摘。そして以下続けて「朱子は則ち然らず」として、朱熹(一一三〇～一一二〇)が詩を愛好し、その効用を認めていた具体例を幾つか挙げ、「真に伊川と氷炭なり」という。「頭巾の氣」については、『薈瓊錄』に「道学家ヲ頭巾氣ト言ハ俗ニシヤラクサイト言フコトナリ。モノ／＼シゲニ子細ラシキヲ謂フナリ」云々とあるのを参照。

(注12) 「吹き皺む一池の春水」は五代・南唐、馮延巳(約九〇三～九六〇)「謁

金門」詞の一節。宋・馬令『南唐書』馮延巳伝に「元帝嘗て延巳に戯れて曰く、吹き皺む一池の春水、卿の何事に干す」とある。

(注13) 韓愈の「窮を送る文」(『昌黎先生集』巻三十六)に「凡そ吾をして面目憎む可く、語言味無からしむる所以の者は、皆子が志なり」と。

(注14) 南宋・葉夢得(一〇七七～一一四八)『石林詩話』巻下。なお、『苕溪漁隱叢話』前集巻四にも、これを挙げ、『群經園杜律註解』には、葉夢得詩話として「深深の字若し穿字無く」云々以下を引く。

(注15) 西晋・陸機(二六〇～三〇三)『文の賦』(『文選』巻十七)に「詩は情に縁つて綺靡、賦は物を体して瀏亮」とある。

(注16) この句、何に見えるか不明。なお、宋・朱淑真的「春日即時」詩の頸聯に「藻を躍す白魚玉尺を翻し、林を穿つ黄鳥金梭を度る」の句あり、南宋・鄭元佐の注に「天宝遺事に載せし古詩に、鶯糸柳を穿ち金梭を擲つ」というが、『天宝遺事』には見えない。

《花を穿つ》は、ひらひらと花のあたりを出入りすることを言う。《深深》として見へは、見え隠れすることを言う。《款款》は、ゆつたりと飛ぶさま。時々ちらつと水面を掠めてはゆつたりと楽しげに飛んでいる。あれこれの微細な生き物がのんびりとそれぞれ思い通りにしているのに、大丈夫たる一人前の男が世にあつて、官界ではゆきづまり、悶々として日を過ごしている。いったいどんな心持ちだろうか。無限の感慨が言葉の上にあらわれている。すべて外界の事物に託けてそこに意を寓しているのは、詩に造詣が深い者でなくては、その趣旨を理解できないのだ。程伊川がかつてこの詩を取り上げ、「このような下らぬことを言つてどうするのか」と譏つたが、「吹き皺む一池の春水」の句について、それがそなたと何の関係があるのかと質したのと、全く同じく詩の興趣を解することの出来ない野暮な人間で、その面つきたるや憎たらしい。『石林詩話』に云う、「杜甫の詩は情をもとにして万物をうつし出し、おのずと天然の巧みさがある。《深深》の字にもし《穿》の字がなく、《款款》の字にもし《点》の字がなかったら、いずれもその精微さを見ることができな

い。されど詩を読むと渾然としており、全く力を用いていないかのようだ。これは、技巧がそのなみなみならぬ氣韻風格を妨げていないためである。晩唐の詩人達に作らせれば、ただちに「魚練波に躍つて玉尺を抛ち、鶯絲柳を穿つて金梭を織る」といったふうになってしまう」。

傳語「風光共ニ流轉 暫時相賞ス莫ニ相違」

※流転：ズルく

傳語管ニ到ニ結尾ニ。此在ニ江上ニ所感スル、故用ニ流轉ノ字ヲ。承ニ人生ノ句一來、故ニ曰レ共ニト。莫ニ相違ニ留春之辭。欲ニ花之不一ニ盡、與ニ前詩ノ上半首ニ相應シテ而總ニ結ス之ヲ也。蓋人生與ニ風光ニ共ニ如水ノ流轉スルカ、滔滔逝而不息、則我モ亦相隨テ而往。今三春已暮、相賞スル亦須臾耳。故ニ傳語ニ風光ニ道、冀クハ爲レ我ガ暫時相留リテ莫ニ違ニ此賞心ニ也。夫風光之去ル、豈ニ可ニ傳語シテ以留ム乎。典衣沽酒以賞ニ風光ヲ、其情亦已ニ切ナリ矣。乃對ニ殘花ニ惜春之甚、所以癡情至ニ此ニ也。二首皆強テ自消遣、非教ニ人ニ流蕩ヲ。語極曠達、意殊ニ悽愴。所謂甚ニ于痛哭^(注20)也。

(注17) ちなみに、伊藤東涯の『秉燭譚』（宝暦十三年「一七六三」刊）卷三に、「文字管到ノコト」として「凡文字ニ上ニ一字アリテ下ノ何字マデカ、ルト云コトアリ。文章ノ書ニコレヲ管到ト云」云々という。また三浦梅園『詩轍』卷五にも「句法」の条に管到の項があり、「句法ハ能ク管到不管頭ノ所ヲ察スベシ。管ハ領ト云ガ如シ。上ニ置キタル字ノ領スル字ト領セザル字アリ」と見える。

(注18) 『論語』子罕篇に「子、川の上に在りて曰く、逝く者は斯の如きか。昼夜を舍めず」とある。

(注19) 『而庵説唐詩』に「曲江は君父の憂ひを憂へ、方に作者の意に合す。否らざれば則ち是れ人に流蕩を教ふるなり。子美豈に人に流蕩を教ふる者ならんや」という。

(注20) 『而庵説唐詩』に「詩は景光に流連するの語を作すも、其の意は痛哭よりも甚し」という。もともと、徐增は「曲江」二首について、杜甫が「三賦を献ぜし後、冑曹参軍と為る前」の「年四十を踰え、其の志氣を展ぶる

を得」ざりし時の作とみて、「若し天宝喪乱の後、拾遺に官たりし時ならば、当に此の詩を作らざるべし」とし、「朝士の国家の急を顧みず、日ひ宴賞を事とす」るのを苦々しく思つての作だとみなした上で、かく言う。

〈伝語〉は、結尾までかかる。これは曲江のほとりて心に感じたことであるから〈流転〉の字を用い、〈人生〉の句を承けているから〈共に〉という。〈相違ふこと莫かれ〉は、行く春を引き止める言葉。〈花〉のにわかには散り尽きぬことを願ひ、前の詩の前半四句と対応して総括しているのだ。けだし、〈人生〉は〈風光〉と〈共に〉川の水が〈流転〉するがごとく、滔滔と逝きてやむことがないとすれば、私も同じくそれに随つて往くのである。今や三月の春はすでに暮れ、〈相賞〉するのもほんのつかのまの間だけだ。それゆえ春の〈風光〉に〈伝語〉して言う、どうか私のためにしばし留まつて、そなたを〈賞〉でる心を裏切らないでくれ、と。そもそも春の〈風光〉が去りゆくのに、どうして〈伝語〉して引き止めることができようか。衣服を質入して酒を買い、そうして〈風光〉を〈賞〉でる。その心情はせつぱつまっている。そこで残っている〈花〉に対して春を惜しむ気持ち甚だしく、痴情のここに至ったゆえんである。「曲江」二首はいずれも無理やり憂を晴らそうとしたもので、他人に遊び回することを唆すものではない。言葉は極めて闊達だが、その心持ちはとても悽愴で、いわゆる「痛哭よりも甚だしい」というものである。

* * *

前稿補訂

『杜律詳解』訳注稿(一) (「文化と情報」第三号)

19頁下段8行 功竣れば↓功竣らば

20頁上段15行 終へる所以なり。↓終ふる所以なり。

22頁上段2行 請ふて↓請うて

25頁下段27行 談何容易

この語は前漢・東方朔の「非有先生伝」（『漢書』卷六五、東

方朔伝及び『文選』卷五十一)に見える。28頁下段3行の「談何ぞ容易なる。」を「談何ぞ容易ならん。」と改め、42頁下段16行に「談するだけなら、なんと容易なことか。」と口語訳したのを「談ずることは何とも容易なことではない。」と改める。

27頁上段5行 載せる↓載する

28頁下段6行 趁ふて↓趁うて

29頁上段9行 其の人を知らず可ならんや。↓其の人を知らずして可ならんや。

29頁上段9行 公↓公の

43頁上段18行 邀遊した↓邀遊した

『杜律詳解』訳注稿(二) (『文化情報学部紀要』第一巻)

27頁上段3行 「ドモ」↓「トモ」

27頁上段11行 贈獻納使起居舎人澄↓贈獻納使起居田舎人澄

28頁下段11行 丁音竹耕反↓丁音竹耕反

28頁下段17行 詩ノ小雅ノ句。↓詩ノ小雅ノ句。

28頁下段18行 夏二覺一段幽靜ナル也。↓夏二覺一段幽靜ナル也。

34頁上段17行 (注14)に追加。他に楊慎『升庵全集』卷六十三、鮮明曰翠の条

や清・翟顥(？一七八八)の『通俗編』卷三十四、状貌の条にも指摘。

36頁上段13行 (注27)これは「諸家の引かぬ文獻」(吉川幸次郎『杜甫詩注』

第二冊)の後に追加。『唐詩實珠』(卷五十、夏の部)に、この詩を載せ、葛稚川「洗葉詩」の両句を挙げる。

40頁下段13行 讀えているである。↓讀えているのである。

44頁下段22行 (注33)に追加。『夜航詩話』卷三に「人、乙夜の故実を質す。

按ずるに、段文昌の淮西碑に、大禹の櫛風の志に遵ひ、光武の乙夜の勤有りと。是れ其の出なり。然れども光武紀に云ふ、経理を講論し夜分乃ち寐ぬと。乙夜の字無し。漢魏已来、甲乙丙丁戊を以て夜を紀し、之を五夜と謂ひ、亦た五更と曰ふ。乙夜は即ち二更なり」云々と見える。

48頁上段9行 元氣である↓元氣である

この他、『訳注稿』(二)、30頁上段5行の「不貪謂其識之清」及び10行の「遠害謂其識之曠」という表現が、沈徳潜『杜律偶評』(卷四)に拠っていること、39頁下段9行の「似若禽魚亦皆有意者也」が『唐詩實珠』(卷三十六、郊野)の「似若燕亦有意者」に基づくこと、さらに『訳注稿』(一)「杜文貞公伝」の(注110)及び『訳注稿』(二)「題張氏隱居」詩の(注15)に触れた顧宸については、孫微「顧宸及《辟疆園杜詩詳解》」(『杜甫研究學刊』二〇〇二年第一期)があり、それに拠れば、その生卒年が一六〇七〜一六七四であることも、茲に補足しておく。なお、原田憲雄氏から仮名遣いの誤り等について御指摘をいただいた。

(二〇〇二・一〇・一三)

にのみや・としひろ／文化情報学部助教授

E-mail : ninomiya @ ci.sugiyama-u.ac.jp